第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域

第7章　津軽石地区における震災の経験
―消防団・自主防災会・民生委員・避難所の活動と課題―

宮坂　清

はじめに

東日本大震災は宮古市津軽石の住民にとっていかに経験されたのか。ここでは、地域社会において専門的な役職に就き、震災を受けて、救援や取りまとめなど特定の役割を果たした方々の語りを取りあげながら、この問いを考えていく。地震後に巨大な津波が押し寄せた津軽石において、自ら被災しながらも、自分のことは後回しにして、他の人々のために身を粉にして働いた方々がいた。そこで、主に彼らの活動を記録に留め、そこで明らかになった課題を示してみたい。

まずその背景となる、津軽石地区の概要、過去の主な地震津波についての記録、東日本大震災の被害状況や行政の対応などを確認し、次いで津軽石の人々への聞き取りやすでに活字にされている体験談を参照しつつ、主として消防団・自主防災会・民生委員・避難所の活動とその課題について考察を行う。

筆者が震災後初めて宮古市を訪れたのは平成25年3月、震災の2年後である。宮古湾沿いに国道45号線を南下し、津軽石川水門を左手に見ながら津軽石の中心部に入ると、使われなくなって久しいと思われる踏切や津軽石駅の駅舎がもの寂しげにたたずみ、その周囲のおそらくかつて住宅が立ち並んでいた場所には空き地が目立ったものの、北に隣接する金浜に比べれば街は残っている印象を受けた。しかし、最初に通ったときに気づかなかった国道沿いの草地が実は法の脇という地区であったこと、また津軽石川を右岸に渡った先に広がる広大な平坦地にもかつては多くの住宅が立ち並んでいたことを聞き、被害の甚大さを思い知った。そして、紹介されるがまま、津軽石の消防団、自主防災会、民生委員、避難所の運営に携わった方などからお話をうかがい、被災後の極限的な状況と、それをなんとかしようとする人々のたくさんの奮闘があったことを知った。

津軽石に生きてきた人々は、今も街を歩けばかつてそこにいた人、あったものを想起し、またそれらがどのように失われたか、そしてそこからどのように再び立ち上がったかを思い出すであろう。しかし私に話をしてくださったような指導的な立場にある方々ですら、心の底に抱え続けるその記憶を言葉にする機会は、時間が経つにつれほとんどなくなってきているという。本稿が、そうした記憶を、世代を超えて伝えていく媒体になることができれば幸いである。

1　地区、および過去の地震津波の概要

(1)　地区の概要

津軽石は、外洋から南西に向けて細長く切り込んでいる宮古湾の最奥部、湾に注ぐ津軽石川河口近くの左岸を中心とする地域である。津軽石川に沿って集落や商業施設があり、南に位置する山田町まで続いている。道路でいえば、国道45号線を宮古市街から宮古湾の北西岸沿いに進むと、宮古湾の最奥部にある津軽石川河口にあたり、そのまま津軽石川の左岸にほぼ沿って南下し、山田町に至る。2011年3月11日の東日本大震災までは、宮古方面から来るJR山田線が津軽石駅を経由してやはり山田町へと通じていた。

津軽石川の下流域は中世には渋留村と呼ばれていたが、文明年間（1469―87）年に一戸系千徳氏に攻められた。やがて一戸氏は大永2（1522）年に払川に新城・払川館（津軽石館）を築くが、天正11（1583）年、千徳氏との間に争いが起こり、落城する。津軽石には、江戸初期にすでに市が開かれており、特に大判川と呼ばれる辺りに立った五日市は、近隣の農山村からも多くの人が集まり賑わっていたという。しかし、この大判川も元和3（1617）年から寛永2（1625）年にかけての暴風雨で流され、集落は新町に移っていった。渋留村と呼ばれていた地域は、総福沢、さらに津軽石と名を変えていった。明治22（1889）年に東閉伊郡で町村制が敷かれた際、

津軽石村と、その北に隣接する赤前村は合併して津軽石村となり、その後、昭和30（１９５５）年に宮古市へ合併して今日に至る。現在は大字津軽石と大字赤前に分かれているが、このような経緯があり、また同じ津軽石川河口に隣接する地域ということもあり、例えば消防団が相互に協力しあうなど、津軽石と赤前はさまざまな側面で関係が深い。

近年の津軽石は宅地化が進み宮古市や山田町に勤めに出ている人が多くなっているが、かつての生業はおおむね半農半漁であった。津軽石は古くから津軽石川の鮭漁が盛んであり、地域の人々はしばしば「鮭川」と呼ぶ。この川に遡上してくる鮭は「南部の鼻曲がり鮭」として知られ、岩手県のなかでも漁獲量が多い。鮭をめぐる祭りとして冬期の「宮古鮭まつり」、11月の「又兵衛祭」などがある。明治35（１９０２）年に津軽石村漁業組合が設立され、同41（１９０８）年に鮭の人工孵化が始まった。以降、改組や改称を経て昭和43（１９６８）年に宮古漁業組合と合併して宮古漁業組合津軽石支所が発足する一方、旧津軽石漁協組合員により鮭の採捕に特化した津軽石鮭繁殖保護組合が発足し、現在に至る。

津軽石の行政区には、法の脇・烏沢（第1地割）、中島（第2地割）、馬越（第3地割）、大森（第4地割）、裏角地（第5地割）、沼里（第6地割）、平川原（第7地割）、久保田（第8地割）、吉原（第9地割）、塚場（第10地割）、千ノ沢（第11地割）、藤畑（第12地割）、大判川（第13地割）、払川（第14地割）、荷竹日影（第15地割）、荷竹日向・米山（第16地割）、根井沢日影（第17地割）、根井沢日向（第18地割）、穴田（第19地割）の計19地割がある。

行政区はさらにいくつかの組や班に分かれており、それぞれに班長、組長、当番、月当番などと呼ばれる役職が置かれている。また地域の組織として、部落会、自治会、町内会があり、これらの組織の範囲は行政区と大体重なっている。津軽石の代表的な神社には下町の稲荷神社、荷竹の米山神社、藤畑の駒形神社があり、このうち下町の稲荷神社は、法の脇、下町、本町、新町、根井沢それぞれの集落に総代がいる。また、津軽石のほぼ全戸が払川の龍谷山瑞雲寺の檀家である（『宮古市史 民俗編 上巻』）。東日本大震災前の平成22（２０１０）年の国勢調査によれば、人口3千４９２人（男1千６３１人、女1千８６１人）、世帯数1千１８３戸であった。

(2) 地震津波の歴史

津軽石は宮古湾の最奥部に位置しており、地震津波の被害を頻繁に受けてきた歴史をもつ。以下では、東日本大震災とその被害をより立体的に把握するための背景知識として、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に掲載された資料を参照し、関連する部分の概要を示す。

ア 近世までの地震津波

津軽石における地震の最も古い記録は、慶長16年10月28日（１６１１年12月2日）のものである。この日、三陸地方で大地震があり、昼八ツ時（14時頃）に大津波が押し寄せ、17時頃大方水が引いた「宮古由来記」。地震が3度あり、津軽石は市日だったため１５０人が死亡したという「盛合家文書」。

元禄12年11月8日（１７００年1月27日）には、地震がないのに津波で海辺の家などがとられ、津軽石へは久保田渡りまで、法の脇は稲荷（神社）の下まで津波が到達した「盛合家文書」。なお、この津波は米国北西海岸シアトル近海で発生した地震によるものであることが明らかになっている「第1巻１５９頁」。

イ 明治三陸地震津波

明治29（１８９６）年6月15日午後7時32分頃、三陸沖を震源とする明治三陸地震がおきた。震度2程度と緩やかな揺れだったため人びとはあまり気にとめなかった。約30分後に大音響とともに大津波が来襲し、最大となった第2波が満潮時と重なったこともあり、大きな被害をだした。

「明治二十九年地震報告」（中央気象台）によれば、津軽石村の被害は、総人口2千618人のうち死者3人、負傷1人であり、総戸数434戸のうち流失家屋8戸となっている。総人口3千459人のうち死者100人をだした鍬ヶ崎町、1千996人のうち死者90人をだした磯鶏村など宮古湾の入口地域と比べると、被害はやや少なめである。

より詳細な調査に基づく「岩手県沿岸大海嘯取調書」（山奈宗真）によれば、津軽石村では、法の脇を含む7か所で被害があり、死者16人、負傷者1人、流亡戸数9戸、潰戸数4戸、流亡納屋6棟、潰納屋2棟であった。津波は北方の宮古湾口より直線に来て三方の海浜を破壊したという。なお、山奈によれば、赤前須賀にあった松原は安政3年の津波で流されて1本を残して枯れてしまったが、その後村民が手入れをして再び松樹林となり、それがあったために赤前の損害が減じた。この津波でまた枯損がたくさんでたが、「将来必要の防風林」であるという。同じく山奈宗真の「岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図」には各字ごとのより詳細な被害が記されている。法の脇は打上浪12尺、浪走り40間であったが、死者や負傷者、流亡家屋は記録されていない。なお、津軽石村の被害は、人的被害、物的被害ともに赤前に集中している。

ウ　昭和三陸地震津波

昭和8（1933）年3月3日午前2時31分、三陸沖を震源とするマグニチュード8・1の昭和三陸地震がおきた。揺れは明治三陸地震のときより強く感じられ、家屋の一部に壁の亀裂や石垣の破損など軽い被害がでた。

「三陸沖強震に伴ふ津浪調査報告」（盛岡測候所、験震時報 第七巻）によれば、隣接する赤前で津波の高さ7㍍、同じく金浜では4㍍であった。「宮古湾に於ける襲来の観測並びに被害地踏査報告・重茂村災害地踏査復命書」によれば、法の脇には5尺ほどの津波が来襲し、床上に浸水した家屋4戸、床下浸水が5戸あった。

「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」（中央気象台、験震時報第七巻）によれば、津軽石村津軽石は人口2千219人のうち死者2人、戸数159戸のうち半壊3戸、床上浸水2戸であった。なお、「田老村津浪誌」（田老尋常高等小学校編）によれば、より被害の大きかった田老村で、津軽石村青年団15名、津軽石村軍人分会20名がそれぞれ1日間、救護の応援活動を行った。

より詳細な調査に基づく「三陸地方津浪災害予防調査報告書」（農林水産局）は以下のように報告している。津波は津軽石の北方より来襲し、赤前部落の前を真っ直ぐに砂浜や松原を越え、その返し波はむしろ金浜や高浜の部落を襲った。津波の高さは5・6㍍であった。津軽石（法の脇）は宮古湾の最奥部に位置するため津波の余波を蒙る程度であった。宮古湾最奥部の沿岸には防潮林が植えられており、波の侵入の勢いは比較的弱くなったが、防潮林前の砂浜にあった製造場や倉庫などは破壊され、その残骸は漁船とともに防潮林により喰い止められた。法の脇部落には防潮林はないが、浸水した程度であった。赤前部落の宅地は海面よりさほど高くないため、その前面に新たに栗石入混凝土造りの防波堤270㍍を建設し、緩衝地帯である津軽石平野に津波を誘導する、とされている。

エ　チリ地震津波

昭和35（1960）年5月24日早朝、地震もないのに大津波が日本の太平洋沿岸を襲った。この津波の原因となったのは、日本時間5月23日4時11分に南米チリ沖で発生したマグニチュード9・5の巨大地震であり、発生のほぼ1日後に津波が日本の沿岸部に到達した。

「岩手県災害関係行政資料Ⅰ」（災害関係行政資料等整備調査委員会）によれば、津波の被害は日本の太平洋沿岸全域に及んだが、波高が高く大きな被害が出たのが比較的大きな湾であり、波高が湾口では低くても奥にいくにしたがって高くなるという特徴があった。宮古湾でも湾口2・0㍍、中央部3・0～5・0㍍、湾奥部で6㍍と次第に高くなっている。津波の波高は全体に明治三陸地震、昭和三陸地震の方が高いが、これらの地震では湾の入口で高く、奥に行くにしたがって低くなっていた点が大きく異なる。波はじわじわと水位が上がる形でやってき

たため、津軽石で人的被害は出なかったが、防護処置の脆弱な湾奥部に大きな津波が押し寄せたため、養殖施設などの経済的な損失が大きくなった。また、津軽石の津軽石川側では林が厚く二重になっているが、山側に行くにしたがって薄くなり一重となっていた。そこは背後に沼があり弱い部分であり、かつ波が正面から押し寄せたために、切れてしまった。防潮林は弱点をもたぬよう一様に生長させ幅をもたせる必要がある、と指摘されている。

「チリ地震津波調査報告書」（仙台管区気象台）によれば、宮古湾最奥部に位置する法の脇は波が奥まで到達し、被害が大きくなった。津軽石川の河口に位置し低地であり、また湾奥で海が浅いため、波が奥地まで到達したと考えられる。

オ　十勝沖地震津波

昭和43（１９６８）年5月16日午前9時49分に襟裳岬沖でマグニチュード7・8の地震が起き、宮古市では震度4が観測された。地震発生から31分後の10時20分、宮古市で津波第1波が観測された。

「広報みやこ NO．１４７」（昭和43年6月1日号）によれば、宮古湾では最大2・16メートルを観測し、海苔・カキ・ワカメの養殖施設などが被害を受け、被害額は3億6千万円に達した。赤前の津波堤防は4・98メートルの最大波高を記録した。ただし、干潮時だったため内陸の被害はそれほど大きくならなかった。

カ　まとめ

宮古湾最奥部に位置する津軽石は、宮古市の他の沿岸地域と同様に、古くから地震津波の被害を受けてきた。詳細な記録が残っている明治期以降だけでも、明治三陸地震津波・昭和三陸地震津波・チリ地震津波の3回、大きな被害を出す津波に襲われている。外洋から深く内陸に切り込んでいる宮古湾の最奥部であることから、津軽石の津波被害には、他地域とはやや異なる特徴がみられる。

明治三陸地震の際、宮古の他地域では揺れが小さく人々が油断していたところへ大津波が来襲し、満潮時と重なりより被害が大きくなったが、宮古湾奥部は比較的、被害が少なかった。それは湾口から距離があり波高が低くなったこと、また防潮林があったことによる。昭和三陸地震は真夜中に発生し、揺れは明治三陸地震のときより強く感じられた。湾口地域で被害が大きかったのに対し、津軽石は法の脇が波を被った程度で、やはり相対的には被害は大きくない。

他方、チリ地震では、明治・昭和の三陸地震津波とは異なり、津軽石の被害は湾口地域よりもむしろ大きくなった。それは主に、湾口で低かった波高が湾奥に向かうにしたがって高くなっていったことによる。

宮古湾は内陸に約10キロメートルも入り込んでおり、その最奥部に位置する津軽石に津波が押し寄せる際、その津波のもつ特性により、他地域より被害が小さくなったり逆に大きくなったりすることがあることがわかる。なお、津軽石には、宮古市の他地域にしばしば見られるような津波記念碑はない。

2　東日本大震災

(1)　地震津波と被害の概要

平成23（２０１１）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9・0の地震が起き、東北地方の太平洋沿岸を中心に強い揺れが観測され、宮古市でも震度5強～5弱の揺れが記録された。主な破壊時間は約１６０秒に及び、余震も頻発した。気象庁は地震発生から3分後の14時49分、岩手県・宮城県・福島県に津波警報（大津波）を発令し、予想される津波の高さを3メートルとしたが、15時14分には6メートル、15時30分には10

写真１　閉鎖されたままの津軽石駅
2013/03/17　撮影：宮坂 清

メートル以上と、高さの予想が引き上げられた。やがて津波が到来し、宮古市では日立浜の気象庁検潮所が15時26分に8・5メートル以上の津波浸水高を観測したほか、宮古市重茂で観測された津波遡上高40・5メートルは国内最高記録を更新した。

「宮古市東日本大震災浸水図」を参照しつつ、浸水範囲を以下に記述する。先述のように、宮古湾は太平洋から南西方面に向けて、湾口から奥部に向けて次第に狭まりながら、深く切り込むような形状をしている。押し寄せた津波は、海岸線の北西面に沿ってみると、まず湾口付近で浄土ヶ浜や、閉伊川の河口にあたる宮古市の市街地や磯鶏の沿岸を洗いながら、さらに湾のより内部にあたる高浜や金浜の沿岸に流れ込み、これらの地域に大きな被害をもたらした。また、湾内海岸線の南東面は直線状かつ沿岸部が切り立った地形をしており、白浜、太田浜、堀内など、北西面に比べると規模の小さい集落が点在するが、それらに被害をもたらしながら湾の奥部へ進んだ。

宮古湾の最奥部に到達した津波は、まず赤前の宮古運動公園前の防潮堤にぶつかり、さらに津軽石川河口を遡上して上流２００メートルの位置に設けられた水門に正面からぶつかり、それらを遥かに越えて赤前そして津軽石へとなだれ込んだ。津軽石川水門付近の左岸には法の脇地区が、さらにその上流に続く平坦地には津軽石の街が広がり、他方右岸の広い平坦地には田畑のなかに住宅や工場・施設などが点在していたが、これらの地域のほとんどが津波にのみ込まれた。津軽石川の左岸に沿ってみると、海に最も近い法の脇からその先の稲荷橋を本町や舘ヶ下へ流れ込み、ＪＲ山田線の津軽石駅を洗い、避難所に指定されていた津軽石小学校の校庭にまで到達した。他方、より広い平坦地が広がる右岸をみると、宮古運動公園、その南東にある赤前の集落の麓から宮古工業高校まで到達し、津軽石川沿いに栄通り、宮古漁業協同組合津軽石孵化場、さらにその奥、駒形通の津軽石中学校の手前まで到達するなど、広大な面積を水没させ、津軽石川の河川敷をさらに上流へ遡上した。

津波浸水高は、宮古運動公園付近で6・76メートル、宮古工業高校の背後で8・34メートル、駒形通の河川敷そばで6・83メートルを記録している。津軽石の北に位置する金浜では津波浸水高が11メートルを越えており、それよりは若干低い。水没した面積を比較してみると、宮古市内で他に広大な面積が水没した田老や閉伊川河口周辺とほぼ同じであり、市内でも有数の面積が水没したことがわかる。宮古湾に押し寄せた津波はその多くが最終的に、最奥部に位置する津軽石の多くを水没させたのである。

地盤沈下も記録されている。津軽石第11地割（駒形通）マイナス42センチ、津軽石第9地割（新町）マイナス33センチであった。地盤沈下の影響で、干満の潮位差が大きくなる大潮の際に沿岸部で浸水や冠水が発生したため、震災後、港湾の嵩上げ工事が行われた。

次に、宮古市および津軽石の被害の概況は以下のとおりである。宮古市全体の死者数は５１７人、行方不明者（死亡認定者）は94人である。津軽石は死者57人（死亡届出者53人、死亡認定者４人）、行方不明者（死亡認定者）３人である。

家屋の被害は、市全体で住家４千４４９棟、非住家が４千６３９棟で、合計９千０８８棟が被災している。被災した住家のうち全壊したのが２千６７７棟で60・２％を占める。このうち津軽石（赤前を含む）は住家６８３棟、非住家７７０棟で、合計１千４５３棟が被災している。被災した住家のうち全壊したのが４１４棟で60・６％を占める。

以上、地震津波とその被害の概況をみると、記録に残る地震津波と比較して被害が際立って大きいことがわかる。大局的にみて、そのようになった原因は大きく２つあるといえる。まず何よりも津波の規模が際立って大きかったことがあげられ、次に津波が押し寄せた地域に宅地が広がっていたことである。チリ地震津波の後、津軽石には高さ8・5メートルに及ぶ防潮堤が築かれており、それまでの防潮林よりも遥かに防潮機能が高まっていたはずであったが、今回その防潮堤をも遥かに越える津波が押し寄せた。さらに、かつて左岸にまとまっていた市街地・宅地が、近年次第に右岸へと広がってきており、その右岸が今回の津波で大規模に水没したため、人的・物的な被害が大きくなったとみることができる。

⑵　公的な調査・対応の記録

ア　公的な調査や対応の記録

地震津波の発生に際し、宮古市を始めとして公的な機関は慌ただしくさまざまな対応をとった。以下では、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に記された公的な調査や対応のうち、関連部分の概要を示す。地震発生から市内の避難所の閉鎖が決まった8月8日まで、津軽石でどのような動きがあったか、その概略をまとめておく。

■3月11日（金）□津軽石小学校へ２００～３００人が避難している。（市民生活部）□津軽石小学校は、床上浸水との情報あり（教育部）。

■3月12日（土）□津軽石地区は、駒形橋まで津波が来たようだが、現時点では通行が可能。

■3月12日（土）□津軽石地区の法の脇付近で線路が国道に乗っている模様。

■3月12日（土）11時30分 調査班報告：□津軽石地区の法の脇は全壊、国道45号に男性の遺体1体あり。□津軽石出張所は全壊。□津軽石小学校、津軽石中学校の校庭まで津波が浸水。□津軽石小学校へ２００人（児童7人、教職員17人含む）が避難。

■3月12日（土）12時30分：□津軽石地区の稲荷橋踏切付近は通行不可能、ヒロセ電機付近に流出家屋が押し寄せている。

■3月12日（土）13時30分：□津軽石地区の稲荷橋、駒形橋の一帯は家屋が流出、付近に3遺体～4遺体あり。

■3月12日（土）14時30分：□津軽石保育所は園児3人が津軽石小学校へ避難、同保育所は軒下まで津波浸水。

■3月13日（日）□津軽石地区の送水管破損の可能性あり。清寿荘までは通水しており、現在も復旧作業中（上下水道部）。

■3月13日（日）□国道45号南ルートは津軽石地区の駒形橋まで開通（都市整備部）。

■3月14日（月）□築地―津軽石間、2車線確保の作業（信号、電柱撤去）。□磯鶏―津軽石間、重茂地区の捜索活動、北海道から４７０人増員、広域で2千人体制（自衛隊）。

■3月14日（月）□津軽石地区通電（東北電力）。□津軽石地区の藤畑―十二神山間が圧雪状況（都市整備部）。□本日の給水予定は、津軽石小学校を自衛隊の給水車で（上下水道部）。

■3月16日（水）12時00分：□津軽石小学校へ高圧電力供給、上水道は津軽石の払川周辺が復旧。

■3月16日（水）□津軽石地区、赤前地区の電力復旧の作業中（東北電力）。

■3月17日（木）12時00分：□上水道は津軽石の払川・荷竹周辺が復旧。

■3月18日（金）10時30分：□岩手県災害対策本部が宮古市にＮＴＴドコモ衛星携帯電話を設置。配置先は津軽石小学校10台。

■3月19日（土）□津軽石地区の避難所で陸上自衛隊が給食支援（市民生活部）。□津軽石小学校で入浴支援（市民生活部）。□ミヤコ石油（津軽石地区）で2千円を上限に給油可能（産業振興部）。

■3月20日（土）□津軽石小学校で給食支援（陸上自衛隊）。□津軽石小学校で男女各1セットの入浴支援（陸上自衛隊）。

■3月22日（火）□津軽石地区の復旧の目途立たず（ＮＴＴ）。

■3月31日（木）□津軽石地区で1体の遺体を発見（陸上自衛隊）。

■4月2日（土）□津軽石地区で自衛隊とともに遺体捜索（宮古市消防団）。

■4月3日（日）□金浜地区の防波堤の応急復旧は今週に完了予定（宮古土木センター）。

■4月5日（火）□戸別送電は津軽石地区で50件（東北電力）。

■4月7日（木）□津軽石地区の国道45号の歩道の瓦礫、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□今後は津軽石川などの河川の瓦礫などの撤去を進める（宮古土木センター）。□津軽石地区などの事業所、一般住宅の通信ケーブルの復旧作業を５００人体制で実施（ＮＴＴ）。

■4月8日（金）□津軽石地区は復電後に給水開始（上下水道部）。

■4月12日（火）□津軽石地区で通信ケーブルの復旧作業（ＮＴＴ）。

■4月14日（木）□津軽石小学校の救護所（静岡県の医療支援チーム）

スペースに保育所が入所予定（宮古保健所）。□津軽石川水門まで建柱15本（東北電力）。

■4月15日（金）□津軽石川の瓦礫撤去は1か月の時間を要する。大型水門の機能回復作業（宮古土木センター）。

■4月18日（月）□住民要望があった津軽石地区の法の脇で通電（東北電力）。□残っているのは津軽石（NTT）。

■4月19日（火）□津軽石地区で建柱、メタルケーブルの架設（NTT）。

■4月20日（水）□河川の瓦礫撤去、津軽石川水門のゲート復旧（宮古土木センター）。津軽石小学校に設置の救護所は、25日に赤前小学校の救護所と統合する（宮古保健所）。□津軽石地区は、4月中旬の復旧予定が4月下旬に復旧の見込み（NTT）。

■4月22日（金）□津軽石地区での建柱、メタルケーブルの架設（NTT）。

■5月6日（金）□津軽石地区の河川付近の側溝整備（陸上自衛隊）。□津軽石小学校、津軽石保育所付近で使用スペースのクレームあり（陸上自衛隊）。

■8月8日（月）□決定事項・避難所は、8月10日をもって全て閉鎖することとする。

表1　各避難所への避難者数（3月12～17日）

	12日 17：00	14日 8：30	14日 17：00	14日 夕方	15日 16：00	15日 最終	16日 最終	17日 最終
津軽石小学校	425	425	425	425	209	425	420	425
津軽石中学校	60	116	116	90	88	70	70	53
瑞雲寺	50	85	85	85	59	21	4	2
駒形公民館	45	60	60	60	48	52	51	30
藤畑公民館	60	60	60	60	11	9	10	廃止
新町公民館				30		30	21	35
荷竹自治会館				なし		なし	5	0
清寿荘				不明		63	58	45

＊「避難所への情報提供 1～28」より作成。

イ　避難所などに関する記録

地震津波の後、自宅に住めなくなった津軽石の人々が避難生活を送り、また地域への救援物資や情報の拠点となったのは、津軽石小学校、津軽石中学校の2つの「避難所」の他、瑞雲寺、駒形公民館、藤畑公民館、新町公民館、荷竹自治会館、清寿荘である（表1）。とりわけ津軽石小学校で多くの人々が避難生活を送ったことがわかる。大まかに津軽石川左岸の人々は津軽石小学校を中心に新町公民館や瑞雲寺、荷竹自治会館へ避難し、右岸の人々は津軽石中学校や駒形公民館、藤畑公民館に避難した。避難所以外の施設に避難者が収容されたのは、左岸の場合、主に、避難所の津軽石小学校の校庭にまで津波が入ったために辿り着けなかった人がいたこと、そして津軽石小学校に避難者が多数集まり手狭であったことによると考えられる。右岸の場合は、後述するように、主に震災当日、藤沼久人氏が判断したことによる。津軽石中学校の体育館は暖房など滞在環境が必ずしも十分ではなく、とっさの判断でより過ごしやすい公民館などに避難させ、宮古市の担当者に事後的に避難所として認めても

表2　各避難所の避難者数・運営主体・閉鎖日

	避難者数	運営主体	閉鎖日
津軽石中学校体育館	約120名	宮古市建設課	7月10日閉鎖
駒形通公民館	約70名	21防災会・駒形町内会	3月31日閉鎖
藤畑公民館	約60名	21防災会・藤畑町内会	3月17日閉鎖
津軽石小学校体育館	約425名	本町協力会	
新町公民館	約30名	21防災会・新町町内会	3月31日閉鎖

＊藤沼久人氏の提供資料より作成

表３　各避難所への緊急物資配送数（3 月 14 ～ 29 日）

	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日
津軽石小学校	425	425	420	425	440	260	352	450	250	365	365	365	365	366	366	366
津軽石中学校	90	70	70	53	50	52	57	58	58	54	54	54	59	59	59	59
駒形公民館	60	52	51	30	30	30	30	30	25	21	21	21	20	20	16	
新町公民館	30	30	21	35	22	21	30	30	30	30	30	30	25	25	23	
瑞雲寺	85	21	4	2	1	解散										
荷竹自治会館	なし	なし	5	0	0	0										
藤畑公民館	60	9	10	廃止	0	閉鎖										
清寿荘	なし	63	58	45	51	51	51	60	50	50	50	50	56	56	55	56

＊「避難所への情報提供 1 ～ 28」より作成。

らったのだという。これらの「避難所」のうち、瑞雲寺や藤畑公民館などは数日のうちに避難者がいなくなっているが、大半の避難者はその後も長期間にわたり避難生活を強いられることになった（表2、表3）。

3　地震津波の語り

(1)　概要

ここでは、東日本大震災についての津軽石の住民の語りをとりあげ、震災がいかに人々により経験されてきたかについて、とりわけ専門的な活動を行った人々に注目しながら考えていく。管見では津軽石の住民による震災に関する回想が掲載されたものとして、体験談集『平成23年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集』（宮古市公民館、平成24年5月、以下『エピソード集1』と表記）、そして『平成24年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』（宮古市公民館、平成25年3月、以下『エピソード集2』と表記）がすでに刊行されている。また、筆者は、2013年4月～2014年8月まで、津軽石の方々からお話をうかがい、それを記録した。これらの語りや回想文の詳細は以下のとおりである。

その他、宮古市が保管している各種の資料、藤沼久人氏から提供を受けた資料を参照する場合は、個別に記すこととする。

以下では、これら震災についての語りを順次、テーマに分けて整理し、個別に記述する。

(2)　地震津波の発生から避難まで

3月11日に起きた地震では大きな揺れが長時間感じられたことから、多くの人が津波の襲来を予想し、また防災放送も津波警報を伝えた。その時点で多くの人々が避難を開始した。ここでは、（ア）自宅などから避難した例、（イ）地震発生時に他所にいて避難・帰宅した例、（ウ）避難に関する教訓、の順で記述する。

ア　自宅などから避難した例

最初の3つは、津軽石川の左岸から車で高台に避難し、その晩、車中泊をした事例である。

■自宅から車で高台に避難し、車中泊した

お昼休みで家族4人津軽石駅前の自宅にいた。1回目の地震でこれは大変だとすぐカギをかけ、貴重品を持ち車に2人ずつ乗って近くの高い山に逃げた。そこは指定避難所ではなく、山には道が無いため、物資を運ぶ消防団にも難儀をかけ後悔した。それにいくら近くの山と言っても、海に向かう道を通ったので危険だった。その晩は車にいたが、長靴に厚手の靴下で良かった。沢水もあったし、次の日に部落の人がジャガイモを炊いてくれた。（体験談1）

■馬越で2晩車中泊し、2階だけが残る自宅へ戻った

3月11日、地震が起きたときは、妻、母、三男と自宅にいた。母に地震だ逃げろと言われたが、片付けたりなんなりで出るまでに10分くらいかかる。車がたまたま車庫から出してあったからそのまま乗って逃げたが、あと10分遅れていたら私も流されていた。車2台で逃げて、避難場所になっていた馬越の高台に行ってUターンしてみると、檜の柱のあるような立派な家がまるごとそのまま流れてきた。自宅のほうはよく見えなかった。

そのとき馬越の高台へは車が20台くらい上がっていた。それでかなりの人が助かったが、下をみたら津波に乗って家が流れてきて道路を塞いでしまい、どこへも行けなくなってしまった。家族4人で1晩、車のなかで過ごしたが、前日盛岡まで行ってきたばかりでガソリンがわずかしか残っておらず、夜とても寒かった。エンジンをかけて暖房をつけたり、また消したりを繰り返した。食料は何も持っていなかった。結局、車で2晩過ごしたが、周りにも20台くらい車があった。2晩目は消防団の方がおにぎりを持ってきてくれた。妻が母を、山田町の豊間根に住む母の妹の家の近くまで送っていき、少しのあいだ頼んだ。避難所でいろいろ面倒をみてくれていたので、私たちも避難所へ行って食事をごちそうになった。

小学校から離れたところに妹が所有している空き家があり、布団なども置いてあったので、次の日はそこに泊まった。食事は民生委員の方、自衛隊の方にお世話になった。被災しなかった方や消防団の方がおにぎりをつくり、みなに配ってくれた。2日目には水が引きはじめたが、見に行くと余震があり、消防団員に戻れといわれて戻った。自宅に行ったのは3日後だった。自宅の1階は柱を残して全壊だったが、2階は残っていた。

法の脇の家屋はほとんど下町のあたりに流れてきたのではないか。すごい状態だった。水門を越えた水と河口の堤防が決壊した水が、勢いよく国道と山田線の間の低いところに押し寄せてきたのだろう。水位は3㍍ほどあったが、自宅の前に大きな建物があって、水や流されてきたものがそれで遮られたために、自宅は残ったのだろうと思う。

法の脇は部落がふたつに分かれていて、6軒か7軒あった。母親の実家があり、寝たきりの祖母がいたが、家ごと流されて破片すらなかった。位牌がだいぶ離れたところでみつかり、祖母は2週間後くらいに運動公園のほうで見つかった。（佐々木優氏、聞き取り6）

■馬越の高台で1晩車中泊、その後友人宅に泊めてもらう

3月11日は午後に事務所へ来て、打合せしていたところに大地震が来た。すごい揺れで、緊急地震速報を聞いて外に出た。私は、チリ地震津波の時にも自宅が流されている。子供の頃から避難指導をうけてきたので、直感的に逃げようと思った。車で国道45号線に出たら信号が止まって渋滞していたが、対向車がないので反対車線を走り、法の脇の自宅にいる98歳の母を迎えに行った。

自宅に着くと母が玄関先に出ていたのですぐ車に乗せ、薬、通帳、印鑑、手袋を車に積んだ。母には常日頃から地震が来たら外に出ろと言っていた。近所から戻った妻も一緒に、3人で自宅を出て、国道ではなく裏の避難道を通り馬越の高台の避難場所で待機した。大きな声で叫ぶ人がいたので見ると、津波が水門を越え、道路を越えたのが見

えたので、車をさらに高台へ移動させた。裏山に上った人が、何もなくなったと言いながら戻ってきたので驚いた。家の屋根が孵化場の方へ整列したまま流れていったという。金浜にあった温泉施設マース近くの防波堤が決壊して、そこから入ってきた波がローラー式に法の脇の家々をさらっていったようだ。JR線も川のようになった。

高台にいた人たちは明るいうちに避難所へ移動しようと言い、津軽石小学校が避難所なので山道を通って移動していった。避難所への道路はがれきで通れなかった。母は山道を歩けないので1晩車にいようと決めた。赤前から流れていく屋根を見ては、何とも言えないような気持ちになった。

妻が避難した際に持ってきた仏様のお供えがその夜1晩の救急食になった。近所の人にも分けた。夜遅く消防の人がおにぎりを持ってきてくれた。私は、たまたま午前中にガソリンを満タンにしていたので助かったが、1晩で半分ぐらい減っていた。山に避難した人たちもいたが暗くて消防も行けず、彼らは近くのゴミに火をつけて暖をとったという。

母が歩けないので、避難所へ行くのは無理だと思った。12日の朝、薬を飲む水をもらいに馬越の友人宅に行き、そこに1晩泊まった。翌日、別の友人宅にお願いして2晩くらい世話になった。副組合長が、自分の家を空けるからしばらくいていいとも言ってくれた。その後、北上の娘が迎えに来て、娘の家に半月いた。

私の職場もだめだった。事務所の柱は残っていたが、サッシや壁が皆壊れていた。金庫も流され、何百㍍も先で見つかった。組合の重要書類が入っていたので、見つけたときは一安心した。（山野目輝雄氏、体験談2・聞き取り1）

津軽石駅などがある津軽石の中心部から北西へ向かうと馬越と呼ばれる高台があり、それを越えて下ると法の脇や金浜の方面に出る。地震の後、20台もの車がそこに避難し、どちら側にも下りられなくなって閉じ込められ、徒歩で移動できない年配者などがそこで車中泊した。避難は徒歩でするのが原則とされていたが、身体が不自由な年配者の場合は、実質的には車で避難するほかない。車がなければ避難できず、また気温の低い屋外で1晩過ごすこともできなかっただろう。

次は、近所から自宅に戻り、津波をみて舘山へ避難し、その後津軽石小学校に避難した例である。

■近所から自宅に戻り、舘山に避難した後、小学校に行く

震災の日、たまたま下の娘が家にいたので、上の娘と待ち合わせて3人で宮古で昼食を食べようということになり、食事と買い物をして戻ってきて、下の娘は友だちと盛岡へ行く約束だと言って14時ころに家を出て、駅の裏の方の八幡様の近くで待合わせしていた。私は風邪気味だったため、帰宅すると買い物してきたものをそのままテーブルに置いて、木沢医院に診てもらいに行き、薬をもらうのを待っている間に地震がきた。とても立っていられないくらいの地震だったため自宅が心配になり、会計は後でするからと断って帰宅した。自宅では物はそれほど落ちていなかったが、立て続けに揺れるため家が崩れないか心配だった。津波は気にしていなかった。そこへ近くで仕事していた夫が帰ってきた。

家がぺしゃんこになったら困るなどと話しながら家の前に出ていたら、近所の男性がおばあちゃんを連れて、こんなことしている場合ではない、津波が近所の木沢医院のところまで来ていると言うので、慌てて長靴に履き替えて避難した。財布の入ったカバンは肩がけにしていた。ベンチコートと、娘が帰宅したときのためにジャンバーをもち、田んぼのあぜ道を通って裏側に回り舘ヶ下のほうへ移動した。田んぼを渡り終えて反対側の道路に出たときには、津波がもう来ていた。津軽石小学校へ行こうか、それとも舘山に行こうかと話していると、女性が6、7人、津軽石小学校の方から来て、小学校の校庭はもう水が来ていると言われたので、そのまま舘山に上がった。

舘山へ上る階段は整備されておらず、木の根がむき出しになっていて崩れそうだった。上から見ると海がみえるので、津波が来るたびに、

みなでまた来たまた来たと言っていた。そこにいる間も頻繁に揺れたが、お堂の脇にある石灯籠が固定されておらず、地震があるたびにカタカタ揺れて危ないので、そこを離れた。そのうちに雪もチラチラ降ってきて、大変だどうしようかなどと言っているうちに水かさが増えてきた。舘山から水に浸かってしまった自宅が見え、電化製品は全てだめだねと話した。隣家の横の広場に停まっていた車が流され、線路を挟んだ向かい側の田の方に移動していた。大変なことになったと思った。舘山には近所の人たちが15人位いたが、舘ヶ下の方にも沼里の方にも下りられるので、浸水していない沼里の方の人たちは上ったり下りたりしていた。

次第に暗くなり始め、このままここにいると暗くなって山を下りるときに足元が危ないから、明るいうちに下りようということになった。沼里の方面に下りると小学校に通じる道があるので、そちらに下りた。最初は女性だけで下りてきたが、10分か15分後に結局男性たちも下りてきた。小学校に着くと校庭に津波が入っており、裏山の方へ避難していた人たちがちょうど下りてきたところだった。（盛合純子氏、聞き取り10）

津軽石小学校の南西に位置する小高い舘山は、避難場所に指定されており、15人ほどが避難していた。車道は通じておらず、人々は階段を登って避難している。

イ　地震発生時に他所にいて避難・帰宅した例

次の3つは、地震の際に勤務先など自宅外におり、そこから戻った例である。

■勤務先からバイクで避難し、山にある小屋に泊まる

震災当日は、勤務先のジュピターで働いていた。地震が起こると、部長が、車に油がある人は避難するように、ない人はそのまま会社にとどまるようにと指示を出した。会社には水は入らなかったが、その後10日ほど休みになった。バイクで新町へ向かったところ、車が流れてきたのが見えたが、それでも入っていった。本町にある二十分団の屯所の前に着くと、水が逆流してきたので、迂回して舘ヶ下を回った。山に農機具を置く小屋をいくつか持っていたため、そこに行き、中に入れてあったものを出して、近所の人たちと入った。

その晩は、避難所でもらったおにぎりを半分にして食べたり、ビスケットを分けて食べたりした。小屋には近所の人が9人泊まったが、寒いこともありみな眠れず、火を焚いてあたっていた。やったことがないことを頭を使ってやり、明日は明日の風が吹くというつもりでいた。助け助けられた。

自宅には水が2メートル30センチ入ったものの、建物は残った。当日の夜9時位までは水が引かなかった。水位がゆっくり上がったため、浮かび上がった畳の上に置いてあったコタツは濡れなかった。庭にあった杉と竹は塩水に弱く、すぐに枯れてしまった。家にあった油と毛布が盗まれてしまった。（猪又忠氏、聞き取り5）

■磯鶏の勤務先から避難し、その後自宅に戻る

地震が起きたときは磯鶏の勤務先ホクヨープライウッドで作業をしていた。地面が前後左右に裂けるような揺れで、これはやばいなと思った。3人で合板をドライヤーで乾かしていたが、生蒸気を出してから電源を切って、まず食堂へ避難した。集まったのは10人ほどだったが、管理職の方たちも右往左往しており、人数確認にもたついてしまった。その後、地震の際に避難することになっていたホーマックへ向かった。到着すると店員たちが避難してきた人たちにカイロや毛布を配っていた。

到着してから20～30分で津波がきた。第1波は防波堤を越えてなだれ込み、2、3軒の家が流されていったのを見た。波は立ってくるというより、押し寄せてくるように見えた。第2波はどさん娘（ラーメン店）のあたりに見えた。ふつうの波とは全く違い、高く盛り上がって雪崩みたいに崩れ、渦を巻いて暴れていた。見るだけでゾッとした。その後、17時か18時に解散になった。車で会社の人たちを家まで送り届けながら、八木沢を経由して津軽石に行くと、まるで湖のようだった。それ

が海水だとは思いもせずに走ったため、車が錆びてしまった。（長澤光彦氏、聞き取り2）

■盛岡から車で戻り、津軽石小学校の避難所に泊まる

3月11日は会議で盛岡に行っていた。地震があって、会議を中止して国道106号線を戻ってきたが、道路に石がいくつも落ちてきた。花輪のあたりから先は車が通れなかったため、車を置いて根井沢から舘山の城跡を越え、40分ほど歩いて18時ころ津軽石小学校の避難所についた。民生委員をやっていたので避難所に泊まり、その晩は一睡もしなかった。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

これらを読むと、同じ津軽石でも、場所により津波の流れ込み方や被害がだいぶ異なることがわかる。とりわけ、津軽石川水門の脇にあった法の脇の集落は、集落ごとほぼ流失してしまうほどの甚大な被害を受けた。他方で、津軽石の集落の中心は津軽石川の河口から1キロメートル近く上流に位置し、しかも集落の入口手前には小高い丘があり、津波は津軽石川の堤防を越えて流れ込んだものの、勢いはだいぶ弱まっていた。そのためその付近では、家屋が水に浸かっても流されずに済んだ例が多い。

人々は馬越の高台ないし舘山の高台のほか、集落の周囲の山に避難した。馬越の高台へ避難した車は閉じ込められ、そこでの車中泊は過酷なものになったが、舘山へ徒歩で上がった人たちは反対側へ下りて津軽石小学校の避難所へ行くことができた。

最後に、他所で逃げ遅れてしまった、津軽石の住民の例である。

■おじが2人、津波に流された

赤前の球場の管理人をしていたおじは、私を先に帰して、その後、鍵をかけて出たんだろうけれども、球場のそばで遺体で見つかった。

もう1人のおじは宮古商業高校の坂でバスに乗ろうとして乗り遅れ、他の津軽石の人4人と一緒に、次のバスまであと何分だなどと話しながら、高浜まで歩いていた。高浜はそのとき下水道工事のためバス停が防波堤の国道沿いに移動していて、3つあるうちの真ん中のバス停で待っていたところへ津波が来た。4人のうちの1人はバス停の前にあった家のバルコニーに掴まってこらえたが、周りをみたらもう誰もいなかったらしい。

おじの遺体は高浜の金浜寄りのがれきの下で見つかった。保険証などがポケットに入っていてわかった。おじたちには子どもがなかったが、何親等以内でないと引き取れないと決まっていて、私には引き取りができなかった。そのため東京にいたおばに連絡をとり飛行機で来てもらって、軽米町にいる私の妹に三沢空港まで迎えに行ってもらい、ここまで連れてきてもらった。勤労青少年センターの遺体安置所で遺体を確認し、常安寺で火葬してもらった。そのとき申し訳ないなと思ったのは、遺体がほんとにきれいになっていたことだった。私たちが捜索して発見した遺体はそんなものではなく、泥はかぶってるしあちこち切れていたりするのに、おじの遺体はいくらか赤くなっていたりしただけで、とてもきれいだった。（舘下光利氏、聞き取り9）

ウ　避難に関する教訓

津軽石の人々は、震災を経て、津波からの避難の仕方や手段について、あるいは避難する場所、防潮水門のあり方について、さまざまな教訓を得ている。

■大きな地震がきたらとにかく逃げる

あの揺れで経験上、津波が来るなと感じた。逃げるが勝ちと考えた。もっと大切な物が家にあったが、それを戻って取りに行くことは考えなかった。今回はチリ地震津波より大きい。JR線がグニャグニャになったが、波そのものが今度の方が大きい。大きな地震が来たら何も持たなくても逃げる。欲張ってはだめ。私の避難は早い方だった。良い経験ではないが、「地震が来たら津波だと思え」だ。見物するような事はしない。（山野目輝雄氏、体験談2）

■防潮堤や水門があっても避難はしなければならない

私はチリ地震の津波を経験しているが、母は昭和8年とチリと今回、津波を3回経験している。チリ地震のときは堤防がなく、ゼロメートル地帯だったから津軽石の踏切の向こうには海がみえて、家へも津波がきた。しかしその後、堤防と水門ができたから大丈夫、今回は大丈夫だろうと思った。それで何も持たずに鍵だけかけて出てきた。だから今思えば母の言葉はありがたかった。母が逃げろと言わなければ私は逃げなかった。堤防があるから、7メートル8メートルの堤防があるから越えないだろうと、越えても大したことはないだろうと思った。でも逃げねばだめだといわれて逃げて助かった。（佐々木優氏、聞き取り6）

■津波を見物に行ってはいけない

放送は、「3メートルの津波」から始まった。次は「6メートル」で「大津波」になった。最初3メートルと言った時には、水門付近に見物客がいた。大津波警報になったので危機一髪で助かった人達がいる。以前から、消防も警察も川を見に行って避難しろと言っていたが、当人たちは大丈夫なのかと思っていた。このような大きな災害があって活動に制限をつけたようだが、油断があったと思う。（山野目輝雄氏、体験談2）

■避難の仕方を家族で話し合っておく

母親は88歳で、1人で避難すると流される。自分ひとりだったら近所の家に行けと言ってある。近所の人にお願いしてある。誰かに車に乗せてもらえと。でないと津波に追いつかれる。家族で逃げ方を決めてある。この辺の人でも津波に追いつかれた人もいる。（佐々木優氏、聞き取り6）

■避難する場所がどこなのか確認しておく

自分の地区の避難場所や避難所がどこであるかをはっきり知っていたわけではなく、何かあったら舘山か津軽石小学校という頭しかなかった。地区ごとに避難所が決まっているとすれば、もしかしたら自分たちは中学校に行かなければならなかったのだろうか、よくわからない。（盛合純子氏、聞き取り10）

■避難場所はきちんと整備しておく

舘山の避難場所は整備がされていなかった。山に上がればすぐなのだが、山へ上がるところが崩れていてなかなか上がれない。舘山へ裏から上る道路もあり、途中までも行けば高くなっている。舘山公園といって市の管轄になっているにも関わらず、何も整備していない。市の職員に、何が公園だ、何が避難場所だ、あれでは上がれないではないかと何回も言ったがそのままだった。今回の震災の後、ようやく整備された。

恵比寿様の高台（根井沢川と山田線の間）については、自分たちもいつか上るかもしれないと思い、現場で側溝の蓋が余れば持っていって階段にしたり、誰かが鉄筋を挿してトラロープを張ったりするなど、地元の人たちで少しずつ整備してきた。部落の人が話しあえば手摺りくらいはできる。（舘下光利氏、聞き取り10）

■車でなければ避難できない人のことも考える

津波の時は歩いて避難しろと言うが、今の高齢社会ではナンセンスだと思う。どうしても、年寄りを車に乗せて避難せざるを得なくなる。そうなるとおのずと道路の整備が必要になってくる。津軽石の橋も狭くて、自衛隊も苦労したようだ。今は車社会なので最低でも2車線あるように整備しなければだめだ。まして、夜だったらもっと動きが悪くて犠牲者がより多く出たと思う。おそらく逃げようと考えないのではないか。家の中で様子を見るくらいだろう。そうなれば、かなり犠牲者が出ると思う。（山野目輝雄氏、体験談2）

■水門が周辺地域に及ぼす影響を考えるべき

法の脇の自宅は、全く何も残っていなかった。金浜から来た波の威力が凄かったのだろう。水門を作る時に説明があって、地元では津波

を遮断すると盛り上がってあふれるので、国道沿いの望楼堤を高くしてくれと言っていた。水門から水を少しは逃がすという話もあったが、どうだったのか。（山野目輝雄氏、体験談２）

■タオルや新聞紙がありがたい

タオル・新聞がありがたかった。タオルを１本みつけ、ふたつ折にして、わずかなお湯で顔を洗った。裏でお父さん、ひっくり返してお母さん、また裏返して孫など繰り返し使った。それが４、５日続いた。新聞紙は座布団にもなる。寒いと前にもかける。何かを包み、風呂敷にもなる。新聞とタオルのありがたさ。ろうそくも常にしまっておくと良い。電池も詰め替える事が大事。ガソリンも以前は無くなってから入れていたが、日にちを決め、あるうちに入れればこういう時に良い。おにぎり１個のありがたさもわかった。物は大切にしなければならないし、準備をしておくべき。（体験談１）

(3) 消防団の活動

地震などの災害の際、被災現場でとりわけ際立った役割を担う集団のひとつが消防団である。３月11日に地震が起きた後、津軽石の消防団員たちは、自分の身の安全はさておき、地域の人々への避難の呼びかけや誘導、救援、水門の閉鎖など、必死の活動を行った。以下では、津軽石を管轄する３つの分団ごとに、その活動をみていく。

ア　消防団第二十分団

■活動の概要

津軽石には、津軽石川の河口から上流に向かい消防団第二十分団（本町）、二十一分団（新町）、二十三分団（払川）の管轄地域が並んでいる。津波の被害は宮古湾に面した二十分団の管轄地域が最も大きく、二十三分団の地域は最も小さかった。二十分団は大きな被害に対応しなければならなかっただけでなく、津軽石川に設置された防潮水門の閉鎖作業という重要な務めを任されていた。津波が上流地域へ流れ込むのを防ぐためには、地震が起きた後、津波が押し寄せる前に、ふだん開いている水門を閉鎖する必要がある。地震の後、この作業を行ったのは団長の中野規男氏と長洞正人氏であった。その作業は最新鋭の遠隔操作装置により迅速に行うことができるはずであったが、実際のところ困難を極め、間一髪のところで成功している。そして、それが終わった後も、今度は溜まった水を排水するための開門作業、そして取り残された人々の救助、そして捜索というように、困難な作業が延々と続いた。

以下、筆者が行った中野規男氏への聞き取り（聞き取り８）に、「広報みやこ」ＮＯ．１５１、長洞利弘（「月刊みやこわが町」通巻３９２号）、中野規男「活動報告⑤ 宮古市消防団第20分団出動記録」、の内容を加えて当時の状況を考察する。

■津軽石川水門の概要

津軽石川河口の津波対策水門（防潮水門）は、岩手県が18年の歳月と約１２５億円をかけて建設し、平成19（２００７）年３月に完成した、県で２番目に大きい水門である。全長１８９㍍、外壁の頂部は海抜８・５㍍あり、電動で上下する高さ４～６㍍のゲートが７基ある。水門は最新鋭の遠隔装置を備え、遠隔制御で降下できる。水門は津軽石川の河口より約２００㍍上流に位置するが、遠隔装置を備えた制御室はそこからさらに１㌔㍍上流にある。また、明治三陸大津波級の津波を食い止めるため、水門の建設にあわせて、河口部の左右両岸計１千０６０㍍に及ぶ防潮堤を、海抜６㍍から８・５㍍に２・

写真２　金浜の防潮堤からみた津軽石川河口
2013/03/17　撮影：宮坂 清

5㍍嵩上げした。水門完成後の維持管理は宮古市が受託し、市は宮古市消防署に依頼し、宮古市消防団第二十分団が実際の管理作業を引き受けていた。

■水門をなんとか閉鎖する

地震発生時、家にいた私は、すぐに車で分団の屯所へ向かった。ポンプ車に乗り、すでに待機していた分団員2人と、津軽石川水門を閉鎖するため遠隔制御所へ向かった。14時55分ころ、遠隔制御所に入り、他の団員を3か所ある他の水門の閉鎖に向かわせた。

ところが水門の遠隔装置が動かなかった。その装置は、水門閉鎖放送スイッチを押すと遠隔操作室の屋上と水門の建屋屋上にあるスピーカーから放送が始まり、放送が終わると一斉降下操作スイッチが押せるようになるものだった。水門閉鎖放送ボタンを押してから水門がすべて閉まるまでに7分かかるため、何かあったときはまずこのボタンを押すことになっている。ところがこれが作動せず、赤い警報ランプが点灯した。やむをえず一斉降下を断念し、7機ある水門を個別に降ろすスイッチを押してみたものの、それも動かない。普段の訓練の時は確かに動いていた遠隔装置が、このときは全く機能しなかった。原因は停電である（岩手日報２０１３年7月18日）。

15時15分頃、水門の建屋へ行って操作するしかないと思っていたところ、他の分団員が「どうなった？」と制御所に入ってきたため、状況を説明してその分団員に再度やってみるように指示した。ポンプ車が他の水門閉鎖を終えて戻ってきたため、それに乗って水門へ向かった。私は分団員もう1人と水門で降り、ポンプ車は避難を呼びかけるためそのまま津軽石の集落へ向かった。水門の建屋機械室で操作盤を手間取りながらも見つけた。操作の方法を知らなかったため、水門の降下が途中で止まったりしたが、15時25分頃ようやく1～7号まですべて閉めることができた。（中野規男氏、聞き取り8）

■水門を越えて津波が押し寄せる

閉め終えてから建屋の外に出て、キャットウォーク（点検用の細い通路）から宮古湾口の方向を見ると、閉伊崎付近の様子が何かおかしいと感じ、そのうちに高浜の付近で水飛沫（しぶき）が上がるのを見た。津波の速度を考えると高台への避難は間に合わないと判断し、もう1人の分団員とともに建屋に避難した。あそこで津波が迫って来るのを見ていなかったら、水門から避難して津波にやられていたかもしれない。

津軽石川の河口へ流れ込んだ津波は水門を越えて上流へ向かい、また防潮堤を越えた波は赤前や津軽石へ流れ込んだ。水門の高さは8・5㍍だが、さらにその上2・5㍍位まで水が入った。水門を越えて流れこむ津波を見て危険を感じ、建屋の屋上に上がったが、膝が震えて立っていられなかった。（中野規男氏、聞き取り8）

■溜まった水を排出させるため、開門する

津波が防潮堤や水門を越えて流れこんだ時間はおよそ10～15分くらいで、15時50分ころに収まったため、水門を開放して溜まってしまった水を排出させようと試みた。ガソリンエンジンによる巻き上げ機が7門それぞれにあったので、それを使って上げようと試みたが、3門をやってもひとつも作動しなかった。1号建屋に戻り動力用の発電機があるのを見つけ、それを始動させたところ各水門に電気が通り、巻上機を動かすことができた。1門から3門までは30㌢ずつ、川の中央部分で底が深くなっているあたりの4門と5門は50㌢、6門と7門は30㌢開放し、排水した。我々消防団にはこの発電機が動力用であるということも、巻上機があることも聞かされておらず、当然だが始動させたことはそれまで1回もなかった。そのまま16時半ころまで河川監視をしていた。

もう1人いた分団員に対し、津軽石地区や学校避難所に行き、状況確認や安全確認をしてから、分団員2、3人と迎えに来るように指示を出した。その間にもう一度津波が来たら、自分だけで閉鎖作業をするつもりだった。ところがなかなか戻ってこず、暗くなり寒くて仕方なくなった。懐中電灯を持って金浜方面から歩いてきた人がいたので、

やむをえず一緒に45号線を遠隔操作室までいくと、中に分団員がいた。

津軽石川の堤防の高さは海面から約6㍍あり、水門を開けて河川敷に溜まった水は排水されても、集落などに溜まった水は排水されなかった。そこで夜9時過ぎに、稲荷橋の近くにある、津軽石川へ左岸から注ぐ川の水門を開けて排水した。何かが引っかかっており手動で20㌢ほどしか開かなかったが、一晩あれば水が抜けるだろうと考えた。その後、避難所に行った。（中野規男氏、聞き取り8）

中野氏への聞き取りから、地震後の津軽石川水門の閉鎖作業には、大きな困難があったことがわかる。とりわけ、最新鋭の制御装置が機能しなかったことは、大きな問題として指摘されるべきであろう。立派な水門をつくっても、それが閉門できないのでは意味がない。そもそも地震は大きく揺れるものであり、その後に停電が起こる可能性が高いのも当然であり、揺れても、停電が起きても、機能する装置でなければならない。また、現場で実際に操作をする消防団員が、装置やその操作方法について十分に知らされていなかったことも、問題であろう。最新鋭の制御装置も、人間がスイッチを入れなければ動かない。こうした装置を設置する際には、設置するだけでなく、それを実際に操作する役割を担う人的資源に対し、継続的に十分な情報を周知し、訓練の機会を提供していく必要があろう。

続いて、翌日以降の消防団第二十分団の活動について、やはり中野氏の聞き書きなどからみていく。

■翌日以降の活動

翌12日の早朝から、生存者救助のための活動をした。国道45号線に、ある住宅の2階部分だけが打ち上げられており、また津軽石駅前にすれ違いのため停車していたディーゼルカーは押し流されて、くの字になっていた。津軽石には、盛岡西消防署レスキューがボートを持って来てくれて、宮古市消防団第二十、二十一、二十三分団が合同で救助活動を行った。まだ水位が下がっていなかったため、ボートで移動して水門を開放するなどして排水した。

津軽石川右岸の土谷川の水門は、赤前の二十二分団が津波の前に閉めたが、津波の後は分団が機能せず、翌日になってから我々二十分団が開けた。昼過ぎにはかなり水が引いて、家屋やその周辺の捜索を行った。遺体があちこちにあった。しかし、捜索は津波警報が発令されるたびに中断せざるをえなかった。

翌13日には陸上自衛隊が到着し、一緒に捜索を行った。地震当日の晩に小樽港を出港し、秋田港から上陸し盛岡経由で来たという。

水門があったために、8・5㍍の高さまでの津波を防ぐことができ、それにより津軽石川の左岸は被害が軽くなったのではないか。防潮堤を越えて水が入った赤前や栄通りのほうが、被害が大きかった。栄通りで18人くらい亡くなっているが、外部から来た、津波を知らない人が多かったことも大きいのではないか。

津軽石は線路の東側の被害が大きかった。道路の上に家屋があったが、じゃまだからといって簡単にどかしたり、壊すわけにはいかない。全壊ならば諦めがつくが、2階だけ残っているような場合が困る。2階から荷物を出しても、倉庫などを先に手配しておかなければ、置く場所がない。しかし勝手に壊したりすれば、後で補償問題になる可能性がある。

第二十分団の屯所も1階は半分まで水が入ったが、屯所の周辺では水の勢いはなくなっていて、がれきも流れて来なかったため、建物は壊れなかった。当時の団員23名のうち、死者・負傷者・行方不明者はなく、家屋について自宅流出が5軒、全壊9軒、半壊7軒、被害なし2軒だった。（中野規男氏、聞き取り8）

■避難所から捜索に向かい、避難所に帰る

避難所は寒く、そのために換気がなかなかできず空気が悪かった。ストーブはずっと点けておくため、夜中も見回りしてストーブに給油していた。学校に大きなストーブが2つあり、後から支援物資で大きなストーブが届いた。当初は電気がなかったから反射式の小さなストー

ブしか使えず、寒いためにみなストーブの前から動かなかった。消防団員が捜索から帰ってくると、びしょびしょに濡れていて、服を脱いでも干すところがないから、どいてもらって靴下なんかを干した。当初、小学校にあったのはゴザと毛布だけで、布団はなかったが、そのうちにフワフワの毛布がきた。寒かったが、ああいうときは気が張ってるから病気にならないのかもしれない。消防団員は避難所と自衛隊をつなぐ連絡係の役割も果たした。（中野規男氏、聞き取り８）

■切り傷を放っておいたら、足が腫れ上がる

３月末位に静岡から医師団が来て、学校の医務室と教室をひとつ開けて入ってもらった。泥で傷がついたら、破傷風になるからすぐ来なさいと言われた。足に切り傷ができたが、薬がないためそのままにしておいたら、だんだん腫れてきて、医者にみせたところ、危なく指を落とすところだったと言われた。医者は救急用の薬をもっており、肺炎を治してくれたり、風邪でも我慢せずにすぐみせにくるように言われた。そばにいてくれて安心できた。（中野規男氏、聞き取り８）

翌日以降の作業に関する記述から、以下の課題が指摘できる。地震津波の翌日になっても、流れ込んだ水が引いていなかったのは津軽石川に流れ込む小河川の水門の多くが閉鎖されたままだったためである。消防団員がボートで移動して水門を開放し、また管轄外だった津軽石川右岸河口近くに注ぐ土谷川の水門も開放し、ようやく排水された。水の侵入を防ぐ水門は、一旦越えてしまえば、今度は溜まった水の排出を妨げてしまう。津軽石川に注ぐ小河川の水門はどれも水門まで行って開閉する仕様であり、そこに行くことが困難な状況において、どのように開閉作業を行うかについて、考えていく必要があるだろう。

イ　消防団第二十一分団

■活動の概要

消防団第二十一分団は、津軽石川の河口よりやや上流に位置する両岸地域を担当している。震災後の救助や捜索は右岸地域を担当した。分団長の佐々木睦雄氏をはじめ、分団員の多くが救助や捜索に携わった。佐々木氏によれば、その概要は以下のとおりである。

消防団第二十一分団は、震度３以上の地震が起きた場合、２か所の水門を閉鎖することになっている。それらはブレーキを解除すれば落ちていく落差式で、閉めるのは５分以内で終わるが、上げるときはエンジンをかけて上げるため15分位かかる。根井沢川が津軽石川に注ぐ地点にある水門は、津軽石川の河口から１キロメートルくらい上流にあるので閉めてもあまり意味がないのではないかと思っていたが、今回の震災では閉じた水門の高さ１メートルくらいのところまで水が上がり、根井沢川への津波の侵入を防ぐことができた。私のいる新町の上は20センチくらい水がきたが、それは旧市道を通ってきた水で、もし水門がなかったら50センチ位にはなったかもしれない。

水門を閉めたら、次は「避難して下さい」と広報活動をしてまわる。今回の地震津波では上流まで水が来なかったので、避難の誘導が主になったが、救助をした団員もいる。けが人を花輪を経由して宮古病院に連れて行ったり、私の自家用車で花輪に１人連れて行ったりもした。栄通りでは、地震津波の当日から翌日まで自宅に閉じ込められていた人が多数おり、たまたまあったゴムボートで13人を救助した。

翌日は、まだ２メートルくらい水があったため、建物の２階から救助した。ただ、ボートが２人乗りだったので、分団員１人が乗って向かい１人ずつ救助することしかできなかった。最近になって市の危機管理課から、第２方面隊（津軽石・赤前・高浜にある５個分団）に６人乗りのボートや照明器具などが支給された。（佐々木睦雄氏、聞き取り３）

■自宅で地震にあい、舘山公園へ避難誘導する

同じく消防団第二十一分団の団員である館下光利氏は、地震発生の直後から避難誘導、救助、捜索など一連の活動に携わった。

地震が起きたときは自宅にいた。赤前で14時に集金をした後、食べそこねていた昼食を津軽石の自宅で食べていたところ、携帯電話から

緊急地震速報が聞こえた。ひどい揺れだったので、ガスを止めて戸締まりをして外へ出た。袢天を着て分団屯所へ行き、踏切から舘山公園高台の避難場所へ避難誘導をした。地域の人たちが避難してきて、一輪車に乗ってきたおばあちゃんを降ろしたりした。ここまでは来ねえべやなどと世間話をしていた。そのうちに舘山に上がっていた人たちが、水門を越えたと言いながら降りてきた。ここまで来るかもしれないと思っているうちに、津波でディーゼル車が流されたために感知したのか、遮断機が降りてしまい、避難してくる車が通れなくなった。車に乗っている人に遮断機を壊せ壊せと叫んだが壊さないため、走って行って2本ある遮断機を1つずつ開けたり閉めたりして車を通したが、1人でやっていたのでは埒があかない。遮断機を折ろうとしたがうまく折れず、後ろにトラックがいたから遮断機を壊してくれと言ったが壊してくれず、石をはさんでみたりもしたが、そういうときに限って近くにある石が小さくてうまくいかない。そうやっているうちに黒い波が来るのが見えたため、車は国道のほうへ誘導して、自分は線路を走って逃げた。波と平行に走っているうちに後ろで津波が根井沢川に落ちるザバーンという音が聞こえた。自宅そばの高台になっている恵比寿様のところに近所の人たちが避難しており、このへんの家に日中に誰がいるかわかっていたから、声をかけて安否を確認した。国道へ出てどちらへ走って逃げればいいか迷っているうちに津波が止まったため屯所に行くと、今度は救助だということになった。（館下光利氏、聞き取り9）

■ボートを借りて右岸で救助活動を行う

二十分団が津軽石川の左岸、二十一分団が右岸を担当することになり、駒形橋を渡って行ってみると、車で流されてきて窓から出たくても出ることができずにいる人がたくさんおり、助けろ助けろと叫んでいた。新町公民館の隣にある舘京自動車にあった2㍍弱のプラスチック製ボートを分団員が借りて持っていった。だがボートの周囲にロープを結ぶ穴がなかった。使っていないボートだったため艪もなかった。仕方がないので、分団員が身体をロープで結えてボートに乗り、その辺に流れてきた木材を艪の代わりにして漕いで行って救出し、ボートに乗せ、分団員の身体に結えてあるロープを他の分団員が引っ張って引き寄せた。ブロック塀の上に立っている人、トラックの上にいる人、保冷車の上にいる人など、暗くなるまでのあいだ、声が聞こえる人は助けた。2人くらいずつ軽トラに乗せて、ガタガタ震えていたから分団の屯所や新町公民館に連れて来て、分団にあった発電機やポット式ストーブをつけた。新町公民館は避難所のようになっていたから、そこに連れて行ったり、中学校へ連れて行ったこともあった。

そのうちの1人は北上市から遊びに来ていた女性で、津波で車ごと流されて、助けた時にはガタガタ震えていた。やむをえずバスタオルと私のジャージを渡して着替えさせた。他にも濡れて震えている女の人がいて、そこにちょうど帰ってきた姉に言って服を貸して着替えさせたが、その人は公民館に来たがらなかったので、仕方なく姉が山田町の豊間根にある母の実家に連れて行った。そこは水も山の沢水を使っているし、薪ストーブを使っていて、米も野菜もあるし、ここよりは食べ物に苦労しないから、すでに息子たちにも、ばあちゃんち行けといって行かせてあった。北上から誰か探しに来るかもしれないからということで、その人に名前を書いてもらって掲示しておいたら、2、3日経ってからやはり探しにきて、連絡をとりあって来てもらって帰した。（館下光利氏、聞き取り9）

■当日の夜中、車両火災のため出動する

当日の晩みんなで屯所に雑魚寝しているとき、宮古の本部から出動要請が来た。「出動できる分団ありませんか、出動できる分団ありませんか」と一生懸命言っていたが、当初みんな怖くて返答しなかった。大通りで車が燃える火事が発生しているとのことだった。水道が止まっていたから防火水槽を使うしかないが、近くにいくつもあるわけではないから遠くの防火水槽からも引っ張って来なければならず、そのためにポンプ車を何台も繋ぐ必要があった。どこかからか引っ張ってこ

なければならない。すると二十分団が「どこに行けばいいですか」と返答し、「これこれこういう訳でとりあえず大通りに行って本部の指示に従ってください」と言っているのが聞こえた。それで、二十分団が行くのなら自分たちも行かないわけにいかないということになり、「二十一分団も出動します」と返事した。消防車のサイレンが聞こえて二十分団や赤前の分団が出動したのがわかった。家に戻っていた分団長も屯所に戻ってきて、10人くらいで根井沢から花輪を回って行った。その日は何も食べていなかったから辛かった。防火水槽があるところに行ったが、そこにはもう別の分団がいた。そこへ本部の車が来て、閉伊川から水を汲むからと言うので宮古橋の近くに行ったが、やはり無理だということで待機になった。何もできずにポンプ車で待機していた。（館下光利氏、聞き取り9）

■翌朝から出動、交通整理をする

鎮火した後、夜中の3時か4時に帰ってきたら、本部より5時から捜索を始めると無線が入った。出動前の点検をしていたら、二十分団の分団長の声で本部へ無線が入るのが聞こえた。前日に床上浸水したが、残っていた家からテレビが盗まれ、分団が盗んだのではないかと言われたと。日本人は規律正しいと言われるが、現実にはかなり盗難が発生した。ちょうど大きくて高額なテレビを新しく買った家が多く、それがかなり盗まれた。やはりそういうことはある。自分の分団の管轄地区であれば誰の家かということは大体わかるが、少し離れるとわからない。見回っているときに誰かに声をかけてあれは自分の家だと言われても、本当にそうなのかわからない。そうやって昼間のうちに目ぼしいものを見つけて夜中に持っていったのかもしれない。

朝早く交通整理をしていたとき、歩いてくる男性を見つけ、聞けば大沢から歩いてきたという。息子が宮古工業高校に通っていて、地震のときは友だちのところに遊びに来ていたが、その後の安否がわからないという。駒形橋を渡って遠回りだが藤畑をまわって誰かに聞いてみろと言って、自転車を貸した。その後、息子と戻ってきて、送っていこうかとも思ったが、歩いて帰ると言って自転車を置いて行ってしまった。

交通整理をしていたとき大変だったのは、サイレンが鳴って通行止めにすると、喧嘩になることだった。危ないとこちらが言っても、相手は行きたい通りたいと言い張る。権限がないから、どうしても行きたいという場合は行かせるしかなかった。うるさい行かせろと言われたら仕方がない。国道は地元の建設会社が作業して地震の翌日には開通した。

■取り残された人たちを救助する

翌朝にはだいぶ水は引いていたが、家屋の2階に取り残された人がけっこういた。声かけしながら確認して、中学校の方に向かってがれきの間をいくと、おじいさんの声がした。階段まで泥が来ていたが家はそのままあり、中学校の避難所に行くかと聞くと、おばあさんもいるから置いていくわけにいかないと言う。そこで一緒に連れて行こうということになり、泥だらけだが上がっていいかと聞いて、上がっていくとおばあさんが震えていた。がれきがあっておばあさんを背負って出て行くことができなかったため、無線で連絡して他の団員を呼んだ。おばあさんを私がおぶり、見たくないだろうから目をつぶってなさいと言って、おじいさんは他の団員2人が支えながら歩き、堤防へ上げて軽トラックに乗せて中学校にいった。

長靴を履いてヘドロとがれきの上を歩き、一軒一軒まずは生きている人がいるかどうか鳶口を使って見て回り、その後も何回も改めて見て歩いた。一度見ただけではどうしても見落としがある。中学校の裏か孵化場の近くに大きなプロパンガスのタンクが流されてきて、ガスがシューシューと漏れて気持ち悪い臭いがしたが、行くことができなかった。

サイレンが鳴ってまた津波が来るといわれて、慌てて近くにあった栗の木に登り、そこから川に波がザザザザーっと来るのを見たりもした。大きいのはもう来なかったが、小さいのは何回か来た。津波の様

子を見ながら、とりあえずOKだな、などと無線で連絡を取り合いながら歩いた。水たまりがあちこちにあった。中学校の裏の水たまりに小魚がたくさんいてキラキラ光っており、よく見たら孵化したばかりの鮭の稚魚だった。カラスやカモメ、トンビが腹いっぱい食べていた。

捜索の際にとても困ったのが、漁網や浮き輪や浮玉がからんで引っかかっていたことで、水門にも絡んでいた。ロープが硬くて、チェーンソーで切るしかない。ヨットハーバーから流れてきたラワン材も少しあった。（館下光利氏、聞き取り9）

■辛い遺体捜索、今も思い出す

捜索は2週間くらい続けた。やはり見落としがあるため、時間が経ってからきちんと探した。二十分団はここ、二十一分団はここというように手分けして探した。

遺体捜索については、怖くなるので思い出したくない。何日か経って泥が乾燥してくると、埋まっていた足や手が見えてくる。見つけると、あった、と。無線を入れて、どちらを向いてるか、北か南か、仰向けかうつ伏せかを報告し、泥を払い毛布で包んで車が通れるところまで運んでおき、市の職員や自衛隊員が来たら、詳しい状況を伝えて引き渡す。

今でもよく思い出す光景がある。まず手が見えた、右手が。ああ、いた、と。背中が膨らんでいたのでリュックだと思ったが、よくみると赤ちゃんだった。近くにもう1人子どもがいるはずだということになって、その近くを一生懸命探したが見つけられず、結局二十分団が見つけた。後から聞いたところでは、その人は家に戻らなければ助かったはずだった。おばあちゃんと、赤ちゃんを背負い2、3歳の子を連れたお嫁さんの4人で栄通りを歩いて避難していたところ、後ろからきた車が乗りなさいと言っておばあちゃんを乗せ、お嫁さんにお前さんも乗って行きなさいと言ったが、嫁さんは何か忘れたと言って子どもたちと戻ってしまったのだという。それが一番頭に残っている。

遺体は傷だらけだったり泥だらけだったりする。見つけてしまうと、うわあっという感じで、辛い。今でもフラッシュバックして、眠れなかったり、涙が流れてきてしまうことがある。こうやって話しているときはいいのだが、何かの拍子に思い出して、走馬灯のようにその光景が頭に浮かび、眠れなくなる。忘れようとすると忘れられないから、そういう時は深夜番組を見て、見ているうちにウトウトして眠れるときもある。本を読んで気を紛らわせることもある。逆に眠ろう眠ろうとすればするほど次から次へと思い出して眠れないこともある。宮古小学校の避難所に精神科の先生が来ていて、精神安定剤をくれるから行ってみればと勧められたことがあり、そんな暇はないと断ったが、あの時もらっておけば眠れたのになと思うこともある。フェイスブックでやりとりをしていて、同じ経験をした人がいることがわかった。自分よりもっとひどい人もたくさんいるだろうと思う。（館下光利氏、聞き取り9）

■屯所で寝泊まりするも、うまく眠れない

私の自宅は被災しなかったが、他の団員が着の身着のままなのに自分だけ家に帰って水風呂を浴びるというわけにもいかなかった。座布団も2つくらいしかなかったのでヘルメットを枕にして眠ったが、痛かった。休むのも大変で、足を伸ばして休みたいが伸ばせず、眠るのも早いもの勝ちで、いびきがすごくて眠れず、ストーブにあたって夜を明かしたりした。靴下が臭いなあと思っても、自分のも臭いから言えない。

地震から4、5日後、電気か水道が通じたとき、1度家に帰っていいぞということになり、そのとき初めて帰宅して水風呂に入り着替えた。その後、鉄板入りの長靴やライフジャケットが全員分、支給された。発電機用のガソリンが少なくなったが緊急車両だということで売ってもらえた。灯油はもらえなかったから、昼間はなるべく使わないなど節約した。トイレットペーパーはその辺りにあるのを見つけてきて使った。（館下光利氏、聞き取り9）

第二十一分団が救助捜索を担当したのは、主に津軽石川の右岸であった。左岸に比べ右岸には津波が勢いよく流れ込み、多くの人が亡くなり、また建物の被害も大きかった。そこでの捜索活動は、肉体的にもそうだが、とりわけ精神的に過酷なものであった。館下氏の聞き取りからは、その記憶は時間が経っても容易に薄まらず、苦しみをもたらし続けていたということがわかる。

ウ　消防団第二十三分団

■地震発生と避難、

消防団第二十三分団は、二十、二十一分団よりも津軽石川の上流にあたる払川地域を担当している。直接の被害は少なかった地域であり、地震津波の後は、捜索活動と後方支援活動を行った。副分団長の長澤光彦氏によれば以下のような状況であった。

第二十三分団の分団員たちは、地震の後、担当している河川の水門を閉めてから避難したようだ。私は19時ころに屯所に到着したが、どこも真っ暗だったため翌朝6時から活動を始めることにした。備蓄してあった毛布を届けに津軽石小学校へ向かったが、泥とがれきに阻まれて辿りつけず、途中で引き渡した。近くに電気屋がいたので発電機を借りてきて電気を点けてもらい、カップラーメンとおにぎりを食べて12時過ぎに仮眠した。着物が少なくて寒かった。（長澤光彦氏、聞き取り2）

■翌朝から屯所でおにぎりをつくり避難所に届ける

翌朝6時に起床し、自分の妻や分団長の奥さんを屯所に連れて来ておにぎりをつくってもらい、分団員に食べさせてから、中学校と小学校に避難している人たちに届けた。当初は瑞雲寺にも避難者がいたので、やはりおにぎりを持って行った。宮古工業高校は周りに水があって届けることができなかった。そのうちに払川地区の人たちが手伝いに来てくれるようになった。4月末まで毎日おにぎりを１００個以上つくったのではないか。

津軽石には4分団があるが、そのうち二十二分団（赤前）と二十分団（本町）は被害が大きくあまり機能できず、炊き出しができたのは被害がなかった二十三分団だけだった。米をもらいに近所を回ると、農家が多いから、次からは「もってけー」と言われて雪崩のように持ってきてくれて助かった。津波の後すぐに発電機を入手しておいたため、もらった籾付き米を精米することができた。小学校、中学校、瑞雲寺、後はスタンドに取り残された人たちに、朝昼晩と届けた。

屯所は分団長が指揮をしていた。分団長が頼んだわけではないが、段々に地域の女性が集まりおにぎりなどを一緒につくるようになった。初日は2人だったのが、払川公民館の人たちが何人か来てやってくれるようになった。瑞雲寺のほうに湧き水があるということで汲みに行ってもらった。払川の人たちの車でおにぎりを配りに行った。（長澤光彦氏、聞き取り2・聞き取り7）

■赤前で捜索や道路確保の作業をする

翌日以降、分団長は屯所にいて指示を出し、副分団長の私は外回りという役割分担だった。拠点は分団屯所で、区長も来て分団長と相談した。あらかじめそういう相談をしていたわけではないので、様子を見ながらケースバイケースでやるしかなかった。私は5～6人の分団員と捜索に行った。自分たちは赤前地区に捜索や道路確保の作業にいった。がれきの山でふさがっていて、通れる道路は1本だけだった。最初は爆撃でも受けたように見えた。ゾッとして、それから1年くらい後まで夢にみた。他の人もやはりそうだったようだ。駒形橋を渡り、駒形から山を回り、宮古工業高校付近から捜索を開始し、道路の上に残っているものをどかしながら、赤前の方向に北上していった。赤前の分団は機能していなかったか、別行動だった。

一軒の家をバラしながら捜索するのに1日かかるが、それをとりあえず半日くらいでやった。まずは人を探し、一段落してから家屋をバラしていった。何度も何度も捜索した。ざっと見て、いないなあと言って移動して、結局そこから見つかったことがあった。車が何台も重なっ

ているところもあった。地震の翌日に、鮭の孵化場の近く、津軽石中学校のそば、宮古工業高校の近くなどで遺体を見つけた。見つけると、無線で連絡してからポンプ車に乗せて運んだ。

分団員は23人だが、動けたのは15人で、遺体捜索は10人くらいで行った。お昼になると屯所に戻って昼食を食べ、またでかけた。長靴は釘やトタンで切れてしまうので、自分は3、4足くらい履きつぶしたし、他の団員も2、3足はつぶしたのではないか。2、3日目、捜索中に大津波警報が出たときは、払川まで一気に戻った。近くの人に逃げろと言ったが、年寄りはそれでも逃げようとしない。

自衛隊の旭川第2師団が地震の2日後か3日後に到着し、4月26日までいた。消防団と自衛隊は一緒に行動したが、警察は別行動だった。同じようなことをやっているのだが、別行動だったから二度手間になったところもあった。警察は重機をもっていなかったが、自衛隊は重機があったから効率がよかった。重機は林業業者のものも借りた。

電話が通じたのは1か月後くらいで、捜索しているあいだは携帯電話が使えなかった。ただし根井沢から花輪へ抜けて行くことができ、花輪へ行けば携帯電話が通じた。消防のアナログ無線は使えたが、デジタルは使えなかったので、ポンプ車や県北バスの無線を使った。簡単なものは丈夫だが、複雑なものは砂埃や雨が入るとすぐに壊れてしまう。

生活インフラについては、約1週間後に電気がきて、それで水道も復旧した。ガスはこのへんはプロパンガスだから大丈夫だった。私は最初の2、3日は屯所に泊まり、その次の日くらいから屯所は空にして帰宅して寝て、朝起きてすぐでかけた。1週間後くらいに水道が来たので水風呂を浴びた。（長澤光彦氏、聞き取り2・聞き取り7）

■泥棒が出没していたが、夜警ができなかった

残念だったのは夜の警戒ができなかったこと。夜中に懐中電灯を持って歩いている人たちがいた。金庫を開けたり、川で金を洗ったりしている人たちがいたという。電線を切って持っていった人がいたという話も聞いた。箪笥を見ると引き出しが空っぽだったりした。捜索の際、お金やバッグなどを見つけたとき、後で回収すればいいと考えそのままにしたが、夜中にいろんなところで明かりがついていたらしく、次の日に行ったら金庫がこじ開けられたりしていた。後からあの時回収しておけばよかったと思った。捜索だとかいろいろな理由でいろんな人が来ていたが、そこに泥棒もかなり混じっていた。（長澤光彦氏、聞き取り2）

以上、消防団の諸活動について3つの分団ごとに記述した。地震津波の後、被災した壮絶な現場に入っていき、救助や捜索の活動を行ったのは消防団員たちであった。交通や情報が寸断された状況下で、自分たちのことは自分たちでする他ない。東日本大震災の際、地域社会の先頭にたち重要な活動を行ったのが、消防団であったことがわかる。その活動により、津波が侵入しないように水門が閉じられ、また溜まってしまった水を排出するために開かれ、車や家屋などに取り残された人たちが救助され、亡くなった人たちが見つかり、道路などの安全が確保され、また避難所への食料支援がなされた。泥棒に対応できないなど、むろん完全ではなかったにせよ、その貢献は最大限、強調されるべきであろう。

他方、その貢献を成し遂げた人々の語りからは、大きな課題が浮かび上がる。つまり、その過酷な活動内容による負担の大きさである。食事も休養も十分にとらない状態で、長期間にわたり危険を伴う活動をしなければならない状況だった。それはどうしようもない非常事態下における責務であるにせよ、極限的であり、一歩間違えば団員自身の命にかかわる。また、捜索活動に伴う精神的な苦痛も大きい。長期間にわたり、その時の光景がフラッシュバックし続けることの苦痛は他者にはわかりづらいが、それゆえに継続的なケアが必要ではないか。

消防団の活動は、震災のような非常事態において欠くことのできない重要なものであるが、それは基本的に団員らの奉仕精神により支えられている。地域社会が消防団の活動のあり方や団員の待遇について

十分な理解と配慮をしていくことが、再びこのような非常事態が起きたときに、消防団が十分に機能するために必要であろう。

⑷　自主防災会・民生委員の活動

津軽石には、災害に対応するための組織として、自主防災会があり、また住民の援助やケアを担う民生委員がいる。地域により活動の濃淡はあるが、一般に災害時に大きな役割を果たす。

ア　自主防災会の活動

■21自主防災会の概要

津軽石の自主防災会は、１９９５年の阪神淡路大震災を機に、消防団の管轄地域にあわせて設立された（後述）。その多くは形骸化し、東日本大震災の際にはあまり機能しなかったが、21自主防災会は会長の藤沼久人氏のリーダーシップにより大きな役割を果たした。

藤沼氏は、（旧）国鉄（ＪＲ東日本）の職員として津軽石駅や宮古駅に勤務する中で、地域社会との関係を深め、町内会長、納税組合長を歴任し、平成10年３月の創設時から21防災会会長を務めている。

以下では、藤沼氏への聞き取りのほか、藤沼氏が保存している各種の資料に基づき、その活動をみていく。

■地震発生、避難誘導

14時45分頃、携帯電話、テレビに緊急地震速報が鳴動し間もなく大きな地震が発生した。地震発生時は自宅におり、地震が落ち着いてから家の中をまわり外に出た。外でしばらく様子を見ていると市の放送で津波が発生するので高台に避難してくださいと放送があり、第１波20㌢の津波が来た。まもなく3㍍、６㍍の津波が来ますので避難してくださいとの放送を聞いたため、各地区の役員に連絡をとり地域の方々や中学生を高台に避難させるように指示し、14時55分に駒形通公民館、21防災会の資材倉庫の鍵をあけ、14時58分に津軽石中学校で生徒の避難を確認し、町内に住んでいる方々に避難するよう声をかけながら、避難場所である高台の駒形神社に行き避難者を確認した。中学生、地区民の一部が避難していた。15時10分頃に校長と打合せをした後、まだ避難していない地区の方々に高台に避難するよう声をかけ誘導しながら、藤畑から赤前経由で稲荷橋へ行った。15時20分、津波が津軽石川水門を越えて津軽石川をのぼってくるのを見たため、駒形へ戻った。町内を誘導していた時、中学校裏の高齢者（92歳）が家から道路に出ようとしていたため、私の軽トラックに乗せて危機一髪で公民館へ収容した。歩いていれば津波にのまれていたと思う。

15時40分頃、中嶋製材所前の道路が通行不能となり、中嶋商店前、そして津軽石中学校グラウンドに津波が来た。15時45分から16時30分まで駒形橋東側の堤防と道路の交差点で交通整理を行った（駒形橋より南側堤防を通り藤畑へ通行できた）。16時20分頃、駒形橋の近くで、高齢者とホームヘルパーが家から出られず助けを求めていたため、製材所から丸太を借り、分団員と2人で堤防から家の窓に橋を渡し、救出した。ヘルパーは逃げよう逃げようと言っていたが、本人がまだだ、まだだと言っているうちに水が床下から上がって畳を持ち上げてきた。戸が動かなくなって出られなくなった。ヘルパーの車は流された。他にも雪が降り寒くなってきたため、高台に避難している方々に防災会の毛布を届け使用させた。17時頃、津波が落ち着き、海水が引けたので駒形神社の高台にいた中学生は津軽石中学校体育館へ（15分くらい）、一般の人は駒形公民館と藤畑公民館へ振り分けて避難させた（津軽石中学校１２０人、駒形公民館70人、藤畑公民館60人、計２５０人）。また避難所が寒かったため、各避難所に毛布を配布した（津軽石中学校30枚、駒形公民館40枚、藤畑公民館30枚）。電気も消えたので発電機配置の手配をして各避難所に備えつけた。中学校、藤畑公民館には町内工務店より借用し、駒形公民館には防災会の発電機を手配し、暖房と明かりをつけた。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■寒かったため公民館に住民を入れるも、市の職員に怒られる

津軽石中学校と津軽石小学校が避難所だったが、私が地域の人たち

を公民館に入れたということで市の職員に怒られた。公民館に入れると余計に経費がかかるのはわかるが、寒いときだということもあり、とっさに公民館に入れるという判断をした。大まかに、駒形の人は駒形公民館、藤畑の住民は藤畑公民館、中学校の生徒と中学校の近隣の人は中学校体育館に避難させた。

公民館は居心地がよかったが、中学校体育館は広いうえに発電機も暖房器具もなく、やむをえず近くの工務店から借りてきて使った。生徒が机にロウソクをたてて灯りをとった。その後発電機のガソリンやストーブの灯油がないと騒ぎになり、夜中1時か2時にガソリンスタンドの店長にお願いして3か所の避難所に給油してもらい、翌日より各スタンドを回って油の確保に努め、なんとか油を切らさず使用することができた。（藤沼久人氏、聞き取り3）

■炊き出し、市からおにぎり配布、自衛隊の食事配布

当日の晩、被災しなかった藤畑地区の住民に炊き出しをお願いし、11日夜から12日夜まで4食分つくってもらい、各避難所に配布した。たまたま藤畑にガス釜を使っている家庭があったのでそれを借りた。14日より市の給食センターからおにぎりが支給された。22日に中学校の校庭に自衛隊が来てからは、ごはんとみそ汁、おかず1品が配布された。

公民館のほうが暖かく、地域の方が冷蔵庫の中身を持ってきてくれたため食事もよかった。中学校の中では小さいガスコンロしか使えず不便だった。津軽石小学校など他の学校は給食室を貸してくれたが、津軽石中学校からは給食室を使わせてもらえず、校舎へも入れてもらえなかった。そのため市の給食センターからくるおにぎりや、自衛隊がくれる食事を食べるしかなかった。お湯は小さいコンロで沸かすしかなかったが、自衛隊が来たあとはみそ汁が飲めた。公民館はガスでお湯を沸かすことができて、みそ汁なども飲めた。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・聞き取り3）

■公民館を避難所として認めてもらう

公民館を避難所として使用することについて、自主防災会会長と町内会長が決断したのだからいいだろうということで、最終的に許可をもらった。許可がおりないと物資をもらえなかった。市の職員は避難所が3か所もあると管理するのが大変だから、1か所に集めたかったのではないか。

藤畑はほとんど被害がなく、電気や水道が止まったために公民館に一時的に避難したものの、17日にはみな帰宅した。駒形公民館の避難所は31日に閉鎖し、その後は津軽石中学校に移動することになったが、移動したのは1人だけだった。その後は我々も中学校に行き、食事の世話などを7月10日に閉鎖されるまで続けた。（藤沼久人氏、聞き取り3）

■自主防災会の役員らが交代で避難所の運営を行う

自主防災会の役員には各避難所に張り付きをお願いし、避難所を閉鎖するまで避難者の面倒をみてもらい、無事に終了することができた。私の自宅も床上浸水30センチだったので、3月31日まで避難して地域の人たちの世話していた。津軽石中学校は、中学校の先生と市役所職員が交代で対応し、4月1日より防災会の役員が交代で手伝った。救援物資の配布等も避難者と被災者に分けて配布を行った（被災者は100～120名）。被災して避難所に避難している家庭を見まわり、防犯にも努めた。

藤畑公民館は3月25日、駒形公民館は3月31日に閉鎖し、4月1日より津軽石中学校に統合した。7月10日までボランティアとして、給食や、支援物資配布等の手伝いを行ったり、地元のノンプロ歌手の歌謡コンサートを開催したりして、避難者を励まし元気づけた。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・聞き取り3）

■「津軽石中学校における支援物資の配布1」

期日：4月10日（日）、午前は津軽石中学校避難者に配布（体育館）、

午後は駒形地区、栄通り地区、藤畑地区の住民に配布（体育館外の屋根のある所）
⑴整理券の配布案内及び配布（2名：地域の方が良い）、⑵物資を受け取りに来た人の誘導、案内（4名）、⑶物資の配布方法の説明、⑷整理券の確認と受け取り、⑸物資の管理、⑹受け取った物資の点数確認。
・1人5点まで（物資によっては1世帯1点）。
・地域住民・防災会が主となって行う。地域住民3～5名、ボランティア4名（先生2名、その他2名）。
・事情により当日来られない人には後で配布する。他の避難所で物資を受け取った人は遠慮してもらう。
・整理券を配布し、番号順に並んでもらう。5人位ずつ欲しい物資を選んでもらう。選ぶ時間は15分。
物資配布の考え方：
食品：日持ちがいいものは避難所本部に置く（水、缶詰類、カップラーメン、おかし、米袋の一部）
衣料品：津軽石中学校避難者を優先して配布
日用品：ティッシュは本部分を確保してから配布、軍手は避難者へ2組ずつ配布
物によっては数量を鑑み点数を制限する。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■「避難者への支援物資の配布」
4月30日に食料品を袋詰（50袋）で配布する。
①飲料5点（水2点、お茶1点、りんごジュース1点、フルーチェ1点）
②カップラーメン4点（ハンファ、どん兵衛、太麺堂々、ラーの道）
③おかし13点（ピーナッツ、ゼリー、アルフォート、せんべい等おかし、じゃがりこ、ポテトチップ、ブラックサンダー、レーズン、ミニおすがた焼き）
④その他8点（カイロ、耳栓、タオル、ブザー、アイマスク、バスタオル）
（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■「津軽石中学校における支援物資の配布2」
5月8日（日）
整理券配布9時～9時40分、物資配布9時30分～
配布場所：津軽石中学校体育館前
物資の内容：衣類（大人、子ども）、日用品、食料品等
震災の被害にあった人を優先する（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■「避難者を励ます舘下良一コンサート」
避難者を励ますために、地元出身の歌手を呼び、コンサートを行った。期日：5月15日18時45分から、場所：津軽石中学校体育館、司会：佐々木弘治、挨拶：藤沼久人、全8曲、避難者からの飛び入りあり、参加者：避難者36名・一般30名。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■津軽石の他の自主防災会は機能しなかった
本町にも宮古20自主防災会があって私が会長をやっていたが、民生委員の役員の家がほとんど流出や全壊だったので、頼めなかった。日中は自分の家に行ってヘドロを片付たり、家が流れた人は位牌や金庫を探しにいっていた。別の地区の防災会から来てくれた方はいたが、本町の20自主防災会は司令塔の命令がなく、機能しなかった。そのため自分たちはその後、下町自主防災会をつくった。（野崎昭敏氏、聞き取り6）
今回、消防団もそうだが、人手が足りず、人のつながりが必要だとつくづく感じた。訓練を受けた分団があるとよいのだが、今はみな会社員だから、すぐに駆けつけることができない。自主防災の組織はあるが、名前だけで、機能していないところが多い。防潮堤などのインフラよりも、とにかく逃げること、人々を率いる訓練されたグループが必要だと思う。（長澤光彦氏、聞き取り2）
21防災会は、人々の避難、避難所の運営など、大きな役割を果たした。おそらくその多くの部分を藤沼氏のリーダーシップに負っており、

藤沼氏の聞き取りや記録から判断すると、むろん問題がなかったわけではないだろうが、比較的統率がとれていた様子がうかがわれる。後半に記した20防災会がほとんど機能せず、避難所の運営に大きな混乱があったのと対照的である。

そもそも自主防災会は、今回のような震災の際に真価を発揮すべき地域組織であり、21防災会の積極的な活動は大いに評価されるべきであろう。それでは、いかにしてその活動は可能になったのか、その背景をみていく。

イ　宮古21防災会の活動と展望

■概要

宮古21防災会は、阪神淡路大震災を機に宮古市消防団第二十一分団の管轄区域内の7町内会の役員及び元消防団合わせて10名で、平成10年3月に設立し、県と市から15種類の防災資機材を受けた（約300万円相当）。内訳は、毛布100枚、発電機1台、投光機1台、小型動力ポンプ1台、ハンドマイク1本などである。

津軽石地区に全4自治防災会が設立されたが、活動しているのは21防災会のみである。会長1名、副会長2名、会計1名、班長7名（主に町内会長）。役割分担は、情報連絡班、生活班、避難誘導班、消火班、救出救護班、安全点検班に各班の人員を割当て、互いに協力し合い活動している。

平成25年現在、会長は藤沼氏で、副会長2名は消防団の出身である。会長は1年任期で、総会で選ぶことになっているが、実際には役員会で決めている。阪神淡路大震災の後、消防団単位で組織を作るように通達があり、最初は名前を貸してくれと言われ貸しただけだったが、後から組織をつくれと言われて、つくって以来、結局ずっと会長をやっている。（藤沼久人氏、宮古FM収録原稿・聞き取り4）

■運営費用と資機材

平成11年4月より会員を募集し、申込した人から年100円を徴収し、運営費に充てている。会員数は420名である。今回の震災でかかった費用については、最終的に危機管理課に請求してお金を受け取ることができた。震災まで、自主防災会は、資機材は支給されるが、それを維持し稼働させる費用は自分たちで負担しなければならなかった。平成24年度から助成金が出ることになった。

資機材をもらったが、その量が多いため、当初は各公民館に分散し保管していた。多くの地域では分団の屯所に入れてもらっているが、二十一分団のような小さい分団には置くスペースがなかった。災害発生時や市の機材点検等の時、1か所に集めて点検を受けなければならないため、不便を感じ、会員の協力を得てプレハブを購入し（1会員500円）、駒形公民館脇に設置し、発電機、毛布、簡易トイレ、ベッド、小型ポンプ、消火器、投光機など、15種類の資機材を入れている。何かあると倉庫の鍵をもっている会長か会計が倉庫を開け、役員が指示を出すことになっている。

平成24（2012）年9月頃、宮古市の危機管理課が資機材や食料の入った防災倉庫を、避難所になっている津軽石小学校や津軽石中学校の校庭などに設置した。管理するのは危機管理課だが、学校長、自主防災会長、分団長は鍵の開け方を教えてもらってある。また、平成25（2013）年4月以降に日本赤十字社から自主防災に資機材が届くことになっている。自主防災の組織の大きさにより、資機材の量がおよそ決まっている。21防災会にはプレハブの倉庫があるが、ないところは助かったのではないか。ただし倉庫を置く場所が必要で、個人の土地ではなく公共

写真3　津軽石中学校校庭に設置された防災倉庫
2013/03/31　撮影：宮坂 清

の土地でなくてはならない。

震災後、宮古市のなかで最も活動がよかったと推薦されて、全労済から助成金を50万円もらった。岩手県で4件が推薦されたという。そのお金で平成24（2012）年の暮れに発電機を買って各公民館に置いた。震災後にいろいろと補助がもらえて装備が整いつつある。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・宮古FM収録原稿・聞き取り4）

■避難訓練

各地区の役員や消防団二十一分団の協力を得て津波避難訓練の実施、防災資機材の点検、取扱い訓練を年2回から3回実施して、いつでも機材が使用できるようにしている。訓練時期は春・秋の火災予防運動週間、宮古市主催の津波訓練、消防団の消防演習等の時に行っている。

町内会、防災会の役員は常に参加するが一般の方や生徒たちは、土日以外は参加者が少ない。1訓練会の参加者は40～50名位である。藤畑、根井沢など、地域によっては防災に関心がない所もあった。

2012年3月11日に避難訓練をやった。中学校に30人、駒形神社に40人集まった。中学校に来た人は駒形神社まで15分ほど歩かせた。避難場所は駒形神社であるのに、市の担当者3人が中学校にいたので地域住民も中学校に来てしまった。避難場所に避難するように放送しているのだからそちらに少なくとも1人は行くべきではないかと言った。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・宮古FM収録原稿・聞き取り4）

■震災後の取り組み

震災を機に21防災会のジャンパーを80着つくり各役員に配布し、今後、災害時はこのジャンパーとヘルメットをつけて活動することとした。また5～6万円かけて21防災会の夏用ベストもつくった。今後、津波の避難場所、避難所を見直してマップを作成し、各家庭に配布する。避難場所の整備、避難所（津軽石中学校、津軽石小学校）への機材の配布申請などを行う。（藤沼久人氏、宮古FM収録原稿・聞き取り4）

■防災のために

自分の身は自分で守るがモットーだが、地域住民が主体となり安全で住みよい、災害に強いまちづくりを目指す活動をすることにより、被害を最小限に留めることができる。地域内や家庭内の安全点検のほか、防災訓練を通して災害に備える活動を行ってほしい。津波の情報があった時は、すばやく高台へ避難する。避難場所を決めて道順を確認しておくことが必要。自分たちのまちは自分たちで守るという強い連帯意識を持って行動してほしい。（藤沼久人氏、宮古FM収録原稿）

このようにみてくると、震災時における21防災会の活躍が、それ以前からの、日常的な努力の積み重ねによるものであることがわかる。例えば、420人の会員から毎年100円の会費を徴収するということは、集まる金額以上に、そこで生じるコミュニケーションから、防災意識を高めてもらうことができるという点が重要かもしれない。その活動は、他のモデルになりうるだろう。

ウ　民生委員の活動

震災当時、津軽石の民生委員の取りまとめ役をしていたのは、下町の野崎昭敏氏であった。盛岡に出かけていた野崎氏は、いち早く津軽石に戻り、民生委員としても活動を行っている。

■盛岡から車で戻り、津軽石小学校の避難所へ行く

民生委員をやっていたので避難所に泊まり、その晩は一睡もしなかった。多くの人がびしょ濡れだった。停電していたが、ちょうどそのとき砂防ダムを建設しており、その業者が発電機を持っていたため、一昼夜は暖房を1基つけることができた。みんな着の身着のままできているから、誰がどこにいるかわからない。しーんとしていて、聞こえるのはペットの鳴き声だけ。おじいちゃんやおばあちゃんも目をつぶっているだけ。おにぎりなどの食料もなかった。地震津波のときに津軽石にいなかった人たちは無事なのだろかと聞かれたが、何もわからない。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■徒歩で高齢者の安否確認をし、薬をもらいに磯鶏まで歩く

翌朝、民生委員として活動しようと思ったが、車が通れないので歩くほかなく、高齢者の安否確認をするのが精一杯だった。被災していなくても高齢者、特に一人暮らしの高齢者は、水道も食料も電気もない状態では生きていけない。食料品を買うことができる津軽石唯一の店が被災していたから買い物もできない。

避難所にいればなんとか食べることはできた。被害を受けていない瑞雲寺や山手のほうの地区の人たちがおにぎりを作ってくれたりしたが、３５０人くらい避難していたため、当初は２人で１つほどしか渡せなかった。川井から来た消防団も手伝ってくれた。毛布は自主防災会に60～70枚ほどあったが、体育館だから寒かった。やむをえず、たまたま卒業式のために準備してあった紅白の幕で身体を包んだりした。

困ったのは、避難してきた人がいつも飲んでいる薬がなかったこと。ある人にここで死ぬのは嫌だと言われ、国道が通れないため徒歩で線路伝いに磯鶏の金沢医院まで行った。そこの医院も被害を受けていたが、なんとか1週間分の薬をもらってきた。先生も被害を受けていたが、調剤薬局が患者のカルテをみて薬をくれて、そこからまた線路伝いに津軽石まで帰った。1日がかりだった。今も元気でいて、その姿をみると、大変だったが行ってよかったと思う。私も疲れていたが、助かった命をなんとかつないでいかなければという気持ちだったからできたのだと思う。それにそうするのが民生委員の役割だった。私は法の脇の担当をしており日頃から安否確認をしていたため、みんな顔がわかっている。

私の自宅は、目の前まで水がきて土蔵が全壊したが、自宅の建物は大丈夫で、高齢者が6人、自宅に避難していた。私は1週間、避難所を離れられなかった。盛岡に背広で行ってそのままだったから寒かった。自宅周辺の道路は通行不能だったため、地震の翌日、山を越えて妻が着替えを持ってきた。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■要介護者が避難所で生活するのは難しい

臨時のものも含め、津軽石だけで7か所か8か所、避難所があった。要支援者、介護を必要とする人などはあらかじめ決められた避難所まで行くことができず、近くへ行くことになる。指定された避難所以外に避難した人が、飲食が来ないなどと言って、小学校にやってきたこともあった。瑞雲寺は被害を受けておらず、高齢者などが避難していた。施設が寝たきりの人などを受け入れてくれないのが困った。避難所は暖房施設がなく、デイサービスを利用している人や寝たきりの人がたくさんいたが、市の職員にお願いしても、どこも空いていないと言われた。開いている地区の公民館を借りましょうということになったが、そこにも暖房がなく、またトイレが使えず困った。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■遠くまで見回りにいき、互いに情報交換する

民生委員は赤前の白浜地区まで担当している。白浜は湾の向こうの北側でここから5キロくらいある。3日毎に塩分のある土のなかを車で見て回ったが、ガソリンが不足していて困った。助けた人を誰かに繋がなければならないということだけを考えていた。

他にも担当の民生委員がいて、お互いに情報交換する。８名の民生委員が1か月間、毎日16時半から、津軽石小学校の一角を借りて打合せした。日中は安否確認に歩いたり、避難所の手伝いをしたりした。私は、高齢者で炊事ができない8軒の家に、ペットボトルや私の家の井戸の水で粥を炊いて配達した。この近所の人たちもその井戸をけっこう使った。水道が通る前は近所の人たちが使っていた。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■小学校の先生たちが子どもを守った

学校に子どもの状況を把握しに行った。先生の迅速な行動のおかげで事故などはなかった。当時の校長先生は、挨拶の中で我慢せいと言ったそうだ。異国の軍歌かなにかだと思うが、いいメロディで、がまんしろ、いつか朝がくる、というような歌詞だった。校長先生は祖父か

ら聞いたと言っていた。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■遺体があがると、火葬に顔をだす

民生委員の人には、遺体があがると、自分の地区の人の火葬のときは行ったほうがいいと言った。私も法の脇で亡くなった６名くらいの方の火葬に顔を出した。バッグなんかに免許証が入ってる。子どもも２人、学校へ入るとこだった。１回避難したが戻って、そのまま流された人が、栄通りに多かった。民生委員をやっていた人の中にも、お年寄りを見に戻って流された方がいた。法の脇は寝たきりの人が多く、線路があるために車が入れないところがあった。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■できる限り状況を把握する

私は避難所にいる人について、高齢者は誰なのかわかるが、いつ来たのか誰なのか、わからない人もいる。人それぞれだから。後からこうすればよかったああすればよかったと思うが、当時は頭が真っ白で、あそこには高齢者がいるとか、それくらいしかわからない。避難所にいなければ、どうだったのかなと思うしかない。１か月くらいのあいだ、津軽石地区の民生委員をやってる人に、あちこちの家に泊まってる人も把握してくださいと言った。何が足りないとか、どこそこのおばあちゃんの調子が悪いとか。簡単なようで難しい。家を無くした方は３か月ぐらい、仮設住宅ができるまで避難所にいた人も多かった。家を流された人は行くところがない。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■あらかじめ組織をつくり、準備しておく

機能するしないはともかく組織をつくっておくことが必要だ。津波ばかりでなくゲリラ豪雨で川が決壊するということもありうる。駒形の藤沼さんのところは被害が少なかった。私も小学校の避難所に行って物資を配布した。

今回の地震は誰も予想しないくらい大きかったが、それでもやはりふだんの準備が大切だ。防災組織の物品が５月に来るから、それを馬越の避難場所の防災倉庫に置くことになっている。訓練が大事だ。防災組織には、女性も入れたほうがいい。トイレや着替えの場所のことなど、女性でないとできない仕事もある。薪ストーブのある家もあり、いざという時に役立つ。電波が悪くてラジオが入らず困った。何かあったときのためにラジオのアンテナを用意しておく必要がある。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

(5) 避難所の運営と避難生活

津軽石で地震津波から避難した人たちが、その後の避難生活を送った避難所のうち、最も人数が多かったのが、津軽石小学校の体育館であった。先述した津軽石中学校の避難所の場合、周辺の公民館へ避難した人も多く、中学校で避難生活を送ったのは１００人以下であったが、津軽石小学校へは４００人以上が避難し、体育館には当初から人が溢れていた。そのこともあって、津軽石小学校の避難所を運営するにあたっては多くの困難が生じた。

以下ではそれぞれの様子についてみていく。

ア　津軽石小学校の避難所

■避難所の概要

津軽石の集落西の山際にある津軽石小学校は、地域の避難所に指定されていた。地震の発生後、車や徒歩ですぐに小学校の体育館に避難した人たちがおり、また当初馬越や舘山などいくつかの避難場所に避難した人々も、津波の危険が少なくなり、周囲が暗くなり始めると、津軽石小学校へ移動した。

しかし、校舎や体育館には及んでいなかったものの、小学校の校庭には水やがれきが流れ込んでおり、また避難所に避難してきた人は４２５人に及び、体育館は人で溢れかえった。また後述するように、指揮系統に混乱があり、市の職員なしで運営しなければならないなど、困難な状況におかれた。指揮をとった「本町協力会」は懸命に運営にあたったが、その運営は困難なものとなった。

■津軽石小学校体育館の避難所へ入る

体育館に入り、地区ごとに座るように言われたため、新町の下の人たちと合流して一緒に座っていた。発電機や石油ストーブを出してきてつけていたが、ストーブを同時に何台も点けると発電量が足りないのか、すぐ消えてしまった。さらに、地震があるたびにストーブを消して入口ドアを全開にしなくてはならず、とにかく寒かった。体育館から溢れ出てしまうくらい多くの人がいた。

津軽石小学校の避難所は、その周りの本町や下町の人たちが主になって運営していた。給食室は無事だったため、被害のなかった家から米を分けてもらい、若い男性が山の奥にある沢水を汲みに行き、ガス釜でご飯を炊いておにぎりをつくった。1回で全員に行き渡る数は作れなかったため、子どもとお年寄りに先に渡した。私も、何回目かにできた塩おにぎりを、その日の夜のうちに食べることができた。

余震が頻繁に起こりサイレンも鳴るので、いつでも逃げられるように、最初の晩は横にもなれなかった。避難するのは小学校の裏山だった。最初のころはみんな避難していたが、何回目かからは途中で腰を下ろしている人もけっこういた。親が迎えに来ない子どもは校舎の中で先生が面倒をみていた。ただ、避難した一般の人は教室には入らないように言われたため、体育館にいるほかなく、トイレも体育館の中にあるトイレを使うしかなかった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■当日の夜、発電機を借りストーブをつけることができた

停電になったが、その日に小学校の裏山でダム工事をやっていた人が避難してきていて、現場から発電機を2機もってきてくれた。分団員に電気屋がいたので、発電機を配電盤につなぎ、ある程度、当日の晩から電気を使うことができた。ストーブも電気なしには点かないから助かった。ただし、電圧が低いため機器が壊れてしまう可能性もあった。（若狭斌氏、聞き取り8）

■体育館に入れず寒かったが、火を焚くなといわれる

地震津波の当日は小雪が降っていてとても寒かった。体育館は避難者であふれていたため消防隊員は屋外にいるほかなく、ドラム缶を半分にして薪を燃やし、暖をとっていた。地震の翌日、遺体捜索を終えて避難所に戻ったところ、教員がツカツカとやって来て、学校に近くて危ないから燃やさないでくれという。だが校庭には車がたくさんあり他に適当な場所がなく、また鉄筋製の校舎は火事になるような建物ではない。もう少しでトラブルになりそうだったが、私が間に入って止め、火を焚くのを諦めた。別の日にも、捜索から戻ってくると、ここには車を停めるな、などといろいろ言われた。日中もトラブルがあった。（中野規男氏、聞き取り8）

■津軽石を通過する電車に乗っていた人たちも避難してきた

地震のときに津軽石駅に停車していた電車に乗っていた人たちが20人、避難所に避難してきた。東京や盛岡から旅行で来ていた人、山田から乗ってきていた子どもたちもいた。津軽石まで乗せてきたＪＲに対応してほしかったが、車掌らが当初は避難所におらず、ようやく来たので、責任感がないのかと怒鳴った。バスが通ることになったからなんとか宮古へ送れと言った。

車で流されてびしょ濡れになった人がいて、近所の人たちが衣類を貸した。その人は盛岡から2人で来ていたが、もう1人は行方不明になっていた。盛岡から安否確認に来た人がいたので、その人に車で送ってもらうことにした。分団長に住所ともう1人の行方不明の人のことを知らせてから行くように言ったのに、そのままいなくなってしまった。そうかと思えば東京から手紙をくれた人もいた。（若狭斌氏、聞き取り8）

■避難所の運営は、私がやらなければ誰もやらない

津軽石小学校への避難者の中に他の地区の町内会長はおらず、本町町内会長の私が動かなければ何も進まないとわかったので取りまとめ役をやった。いい勉強になった。戸惑いが大きく、気が回らない部分もあったが、しばらくやってだんだん様子がわかってきた。

ストーブに使う灯油については、ガソリンスタンドに避難所を優先してくれとお願いして、毎朝トラックで配達してもらった。他の避難所では灯油が足りなくなったところもあったらしい。ガス屋さんもあったため、プロパンガスを供給してもらい、機器を直してもらった。そういう面では恵まれていた。

病気を出してしまうことがとても心配だったが、医療関係者がいてくれたので心強かった。交通手段がないから病院に行けない。民生委員は避難所の運営組織に入れず、外を回ってもらった。（若狭斌氏、聞き取り８）

■体育館はとにかく寒かった

体育館は完全に密閉されておらず、ガラス窓が多いため熱が逃げてしまい、寒かった。2、3日経つと、毛布が入っていたアルミの袋で窓を覆ったり、入口近くに衝立を置いて風が直接入らないようにした。毛布が十分になかったため、子どもと高齢者に優先的に配布し、2人で1枚を一緒に使ったり、それもない人は毛布の入っていたアルミの袋を履いたりした。毛布は備蓄用に体育館か校舎に少し置いてあったのではないか。私はジャンバーを着てその上にベンチコートを着ていたため、床の冷たさがいくらか和らいだ。

避難所では、朝5時起床で6時には朝食だった。もう少し朝ゆっくり眠っていたかった人もいたのではないか。一部の照明が一晩中ついているためによく眠れず、やっと寝ついたころに起こされるという人もいた。最初に中学校にいて、小学校に移ってきたが、寒いからとまた戻って行った人がいた。小学校のほうが寒かったのかもしれない。（盛合純子氏、聞き取り10）

■市の対応も良心的ではなかった

宮古市の職員は津軽石小学校の避難所へなかなか来てくれず、来たと思ったら、今日はある課から何人、明日は別の課の人というように、毎日違っていた。同じことを何度も説明しなければならず、しかも責任をもつことのできない人たちばかりで、指示を仰ごうにも、携帯電話が通じないから連絡もできない。市には職員を常駐させてほしいとずっと要望していたが、叶わなかった。1日交代ならいらないと言って帰したところ課長たちが来たため、1日交代では何もできない、私の家も被害にあってるんだから帰りたいと訴えた。しかし、それなら2日交代ならばどうだと言い、常駐という言葉はついに出てこなかったため、結局いらないということになった。（若狭斌氏、聞き取り８）

■仕事を分担する体制をつくり、協力を仰ぐ

そこから私の戦いが始まった。私は本町の町内会長で、避難所の運営に携わっていたが、職員はいらないと言った手前、問題が起きないようにしなければならない。私が指示を出して、必要な係をつくって仕事を分担する体制をつくり、避難している人たちにもそれを説明し、指示にしたがってくださいとお願いした。避難者は当初４２０人ほどいて、足の踏み場もなかった。地区別に名簿づくりをした。自宅で眠ることはできるが食事が作れない人の名簿もつくらなければならなかった。そのような通いの避難者が50世帯くらいいた。朝は起きると、今日は掃除するとか、これこれを守ってくれとか、まず指示を出した。一番心配したのは病気、特に感染症だったが、結局でなくてよかった。手の消毒など、衛生面には気を使った。毎日夜7時から、避難所の代表と消防でミーティングを行い、その日の報告と翌日の予定を話し合い、市から届いた情報を報告した。（若狭斌氏、聞き取り８）

■おにぎり配布、炊き出し、自衛隊による食事の配布

当初、食事は根井沢や払川の人たちがつくってくれたおにぎりだった。とても助かった。避難所でもやろうと思ったが、小さい鍋がいくつかあっただけで全く足りなかった。小学校に使っていなかった二重釜があったので使わせてくれとお願いし、なかなか使わせてもらえなかったが、なんとか使わせてもらえることになった。赤前小学校では給食室を開放して炊いたらしい。二重釜でつくるようになってから食

事が全員に行き渡るようになった。やがて中学校の校庭で自衛隊が食事をつくってくれるようになり、おにぎりでなくてご飯を食べることができた。りんごなどいろいろなものをくれ、みそ汁の具もいろいろ変わった。

■避難所の炊き出しは自衛隊の元調理班長が指導した

航空自衛隊を退職したばかり、元調理班長だった盛合さんという人が来て、ずっと一緒に泊まってくれた。津波の際にたまたまこちらに来ていて、お前やれということになった。あのようなときに何をすればいいか、例えばこの品物が来たらこう調理すればいいということがよくわかっていた。

自衛隊ではご飯は1人何グラムと決まっているらしい。人数を伝えて注文すると実際には足りなくなるから、多めに注文するのだそうだ。そんなことは初めて聞いた。なぜ避難所にいる人数とご飯の人数が違うかと、後になって聞いたことを覚えている。ソウメンが来たことがあったが、茹でて時間が経っていてもう固まっていた。彼が固まらないソウメンの茹で方を自衛隊や我々に教えてくれた。彼のおかげで食事については恵まれていた。自衛隊のメニューの他にもいろいろつくって食べさせてくれて、うれしかった。（若狭斌氏、聞き取り8）

■1週間後に水道が通り、自衛隊が校庭に風呂を設置した

避難所にいたときは水を汲むのが大変だった。小学校の裏にあるお墓の脇に水が湧いており、みんなバケツをもって汲みに行った。1週間後に電気がくるまで、ずっと水を汲みに行った。自衛隊が風呂を設置したときは、すでに電気がきて水道が通っていたから、水道を使った。（若狭斌氏、聞き取り8）

風呂は津軽石小学校の校庭に設置するのがいいだろうと自衛隊と話して決めた。曜日ごとに入る地区を決めた。高浜や金浜、白浜からも来た。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■新潟、次いで静岡から医師が来てくれる

私はもう少しで破傷風になるところだった。長靴に塩水が入っていて、靴擦れしたところからばい菌が入ったのではないか。医者が新潟からまず来て、後で静岡の医者が来た。見せたら、毎日消毒しなければいけない。治らなければ足を切断しなければならないと言われた。その医者がもぞもぞリュックサックを探して、靴下を出してこれを履きなさいと言ってくれた。ありがとうございますといってありがたくもらった。風呂に入ってから見せたら、治ってきましたねと言われた。

津軽石にも医院があったが被災してしまった。先生薬くださいと言ったが、それどころではない、片付けないととても診療できないと言われた。そのため自衛隊に泥を出してもらい、ボランティアを入れて片付けた。中でも人工透析が大変だった。数日ごとに車で病院をなんとかまわった。（中野規男氏、聞き取り8）

■ボランティアに助けられた

保健婦の人たちが来て、体操を教えたりした。ボランティアはまだ来ていなかった。ボランティアは社会福祉協議会を経由して少しずつ来た。町内会として、2次災害が起きないようにまず側溝をきれいにしてもらった。下町公民館もやってもらった。ボランティアさんには助けられた。「阪神淡路大震災のとき私も助けられたので今回来た」と言っている方もいた。下町公民館も1か月くらい置きっぱなしにしていた畳を片付けてもらった。冷蔵庫などは道路に出しておけばもっていってくれた。ありがたかった。ボランティアの人がトイレに困っていたので、公民館のトイレや漁協のトイレを使ってもらった。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■自宅と飼い犬のこと

私の自宅は小学校の目の前だが、避難所に6か月おり、手がつかなかった。朝起きて自宅に行き少し片付けて避難所に戻り、朝食をみんなにあげてからまた自宅に行き、10時になるといろんな物資がくるか

らまた避難所に戻り、それが終わると昼食、という具合ではほとんど作業にならない。自分では何もできなかったが、知人が手伝ってくれて助かった。

シェパードを飼っていたが、ちょうど散歩に行こうとしていたときに地震がきて、これはまずいと思い、犬小屋へおいてから、学校へ行った。当日の夜中、泥でうまく歩けなかったが、なんとか自宅まで行った。途中まで行ったら犬が鳴いて、生きてたと思った。連れていこうと思っても歩けないから仕方ない。自宅に着いて玄関を開けたら、うわっという感じだった。居間に入ったらソファが濡れていなかったので、そこに新聞紙を置いて犬にここにいろと言っておいた。（若狭斌氏、聞き取り8）

イ　津軽石小学校避難所の困難な運営

■避難している人以外についてもっと考えるべきだった

津軽石小学校の避難所は、多くの人が狭い場所で長期間、避難生活を送ったこと、避難していた人たちを統括するような役職者がいなかったことなどから、その運営は相当に困難なものになった。先述のように、他に誰もやる人がいなかったために、本町町内会長の若狭氏が取りまとめ役を担ったが、大きな苦労があった。そして、一部の人たちに配慮が必ずしも行き届かなかったことから、不満が生じることになった。若狭氏自身、次のように回想している。

後で気がついたが、避難している人以外の人のことも考えるべきだった。どこの店に行っても棚が空っぽだったと後で聞いたが、当時は気が回らなかった。避難していないが食べ物を入手できない人たちが、遠慮して避難所に来れなかった。今後は、そういう人のことを考えるようにしていかなければならないと思った。支援物資については、持ってきたので受け取ってくださいと言われ、最初は受け取っていたが、中越地震のとき最後に物資が余って困ったことを聞いていたため、だんだん断るようになった。（若狭斌氏、聞き取り8）

以下は、さまざまな理由から配慮が必ずしも行き届かなかった人たちの声である。

■家を失った人が避難所の手伝いをし、不公平感が募る

トラブルはいろいろあった。避難所には家が残っている人と残っていない人が混在していた。家が残っている人は朝になれば片付けをするために出て行くが、家がなくなってしまった人は避難所にいるほかなく、そうすると炊事などいろいろな手伝いをさせられる。それが積もり積もって、私たちは家がなくなってしまって大変な思いをしているのにあなた方は家があるだけまだましでしょう、それなのになぜ私たちがこんな思いをしなければならないの、という気持ちになってくる。

そのため、私の夫は夜が明ければすぐ片付けに出て行くが、私は炊事の手伝いをして洗い物が終わった後に出かけるようにした。夫の分のご飯は申し訳ないけれどもらっていきます、と言ってもらっていた。家がなくなって気持ちが落ち込んでいると、誰かの言葉を、その意図とは違ったかたちで解釈してしまうことがある。それがもとで取っ組み合いの喧嘩になりかけたこともある。（盛合純子氏、聞き取り10）

■避難所から出て行くよう促されるが出て行けず、辛かった

地震津波から1週間後くらいに、避難所が狭いため自宅が残っている人は出てほしいと言われた。しかし、自宅は2階までは水がきていなかったものの、電気がないことには照明もラジオもテレビもなく、暗くなったら足元も見えない。古い家だから畳を外すと床が抜けそうになり、懐中電灯では心もとない。1階に反射式ストーブがあったが水に浸かったために使うことができず、電気がないためにファンヒーターは使えず、2階に暖をとるものがなかった。だから出て行ってくださいと言われても出ていけなかった。さらに2週間目くらいには、津軽石中学校の避難所が津軽石小学校の避難所に統合されることになり、中学校の人たちが来て狭くなるから、やはり出て行ってくれと言われた。

さらに、新町の人は小学校ではなくて中学校に避難するのではない

かと言われて驚いたこともあった。最初に舘山に避難すればそこから行ける避難所は津軽石小学校しかない。自分たちはここにいてはいけないのかと思った。いろいろ言われながらも、仕方なく3週間、避難所にいた。（盛合純子氏、聞き取り10）

■食事を代わりに受け取ることができない

かつて自衛隊で衛生部隊にいたという人と本町の人たちが、主に現場で指示を出していた。最初のうち朝食をもらって夫に届けていたが、いない人にはあげられないと言われた。夫は日が暮れるまで片付けをしていて6時の夕食の時間にいないことがあったが、やはりいない人にはあげられないと言われた。代わりにあげるわけにはいかない、夕食の6時までに戻って来ないとだめだと言われた。

しかし食事はむしろ余っているようにみえた。食事をもらいに行くと、子どものごはん茶碗に一杯くらいしかもらえず、片付けに出る若い男性などはとてもそれでは足りないのではないかと思うくらいだったが、次の日に給食室に行くと、前日に余って処分されるご飯が山盛りになっていたことがあった。自衛隊が来てくれてからも同じで、毎食十分な量を持ってきてくれるのに、あげられるのはこれだけと制限された。仕方なく自宅から火を通さなくても食べられる食材や菓子を持ってきたりしていた。救援物資の中にお菓子があったがそれもあまりもらえなかった。ステージ上の幕が引かれていて、その後ろには支援物資が山のようにあったが、ジュースは食事のときに1本のみだとか制限された。仕方なく安否確認に来た親戚などが持って来てくれたものを食べた。（盛合純子氏、聞き取り10）

■日中、片付けに出ていると支援物資がもらえない

私たちは朝に出て行けば夕方まで戻らなかったから情報が入らなかった。新町上の人たちが昼食に持って来てくれたおにぎりや、自分たちで用意したカップラーメンを食べた。避難所にいる人たちには、何時から支援物資が配られるという連絡がくるが、いない人には全く届かない。夕方に戻ってきてから、自衛隊が持ってきてくれた支援物資が校庭にあると聞いて、行ってみるとほとんど残っていないということがあった。避難所にいる人といない人の情報の量が違った。夕方、避難所に戻るとダンボールをいくつも持っている人たちがおり、避難所に昼間いた人たちで支援物資を分けたと聞かされたこともあった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■本町以外の人は情報が入りづらい

自分たちの地区からも運営に参加している人がいれば情報がもっと入ったのかもしれないが、本町の人たちが中心になって運営していたために、自分たちには情報が入りづらかった。本町だけで仮設住宅への入居希望をとったという話も聞いたので、どうしたらそういう情報をもらえるのかと問い合わせしたが、新町の人は関係ないと言われた。では行政連絡員に聞けばいいのかと思って聞いてみると、そんな話は知りませんと言われた。こうした情報を聞いても、それが本当かどうかもよくわからなかった。（盛合純子氏、聞き取り10）

当初は助けるということが重要で、その人がどこの人かということは関係ないが、時間が経ち情報や噂が交錯すると、だんだんそうなってしまうのだろう。全部の人に平等に情報を流すべきだったがそうはならなかった。放送で流すということもなかった。緊急用の放送だからそういうことには使えなかったのかもしれないが。（舘下光利氏、聞き取り10）

■好きなだけ支援物資を持っていく人がいる

小学校より高いところにあり水が入っていない家の人が、3人4人で来て、袋いっぱいに支援物資を詰めて帰った。避難所に電気が来るようになると携帯電話の充電をしにきたり、お風呂に入って行ったりした。運営していた人たちは、その人たちが被災していないことをわかっていたはずなのに、何も言わなかった。それなのに家に水が入って片付けしている私たちに、地震の1週間後くらいに出て行ってくれ

と言った。

自分たちの家には赤ちゃんはいないが、遠くに孫がいるからと粉ミルクやオムツをもらっていく人がいた。地元につながっていない人のところへ流れた支援物資が相当あったのではないか。家族みんなで来てカップラーメンを1人1箱ずつ持っていく人もいた。支援物資の意味を間違えているのではないかと思った。最後の方になってようやく、支援物資を受け取るときに名前を書かせるようになった。

お風呂のときも、何時から何時まではこの地区だと言われてその時間を待っていると、誰でも入っていいみたいだよ、私入ってきたよと言っている人がいた。入れるだけありがたいが、時間が守られない。（盛合純子氏、聞き取り10）

私は、自分はなんとかなるから本当にどうにもならない人がもらうものだと思っているが、逆にそういうときだからもらわねば損だと考える人もいる。被害の大小はあっても同じ被災者だからもらうというふうに言う人もいる。（舘下光利氏、聞き取り10）

■避難所から自宅に戻ると食事がもらえない

3週間目に出て行くときに、食事はどうしますかと聞かれて、まだガスコンロが使えないので自分たちで作れるようになるまでもらいに来てもいいですかと聞いたら、もう店も開いてますから自分たちの食事は自分たちで工面してくださいと言われた。私も意地っ張りなので、ああそうですかわかりました、それならいいですと言った。仕方なく隣の家からカセットコンロを譲ってもらいしばらくそれで煮炊きした。家に戻って2、3週間した頃、盛岡にいる姉がガス台を持って来てくれて、それでガスを使えるようになった。避難所にはそれ以降、行こうと思わなかった。行くと嫌な顔をされるから行く気にならなかった。

避難所に行くことはもうないだろうと思っていた。自衛隊が支援物資をもってきてくれても、自分たちはそこへは行けないと思っていた。とにかく自分たちでなんとかしなければと思っていたが、近所の人が、今度の何曜日にはお米を配給してくれるから行こうというので、いや私たちはもらえないのではないかと言うと、いやいや被災していない人までもらっているからいいんだと言われた。それで初めて行ってみた。行く人は毎日のように行っていた。途中からは野菜も支援物資として配っていた。私は自分たちの分だけと思うからきゅうりであれば2、3本持っていくが、なかには1箱持っていく人がいた。なぜこれだけ感覚が違うのだろうと思った。なま物だし、早く支援物資がなくなれば自衛隊は早く引き上げることができる、だからたくさんとるんだと言われた。山のように抱えていく人たちもいた。（盛合純子氏、聞き取り10）

避難所に入っていない人は避難所の人よりもらえる食料が少なく、差別がはなはだしかった。避難所に行くとそこのリーダーから変な目で見られる。排除するような目で見られる。朝夕の食事を貰いに行くと、いつ自炊するのだと言われる。家内もあそこへ行くのは嫌だと言う。避難所外の人は食料をとりに行くのも恐る恐るで、これはよくない。多くの人が嫌な経験をしている。今後は行政がきちんとしないといけない。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

このように、津軽石小学校避難所の運営について、一部の人たちは不満を抱いていた。運営に携わっていた若狭氏自身も、必ずしも配慮が行き届かなかったと回想している。そのようになってしまった原因はどこにあるのだろうか。先にみた津軽石中学校やその周辺の「避難所」と比較してみると、大きく2つの原因が考えられる。まず、多くの避難者が狭い避難所に集中したこと、そしてこの地域における災害への備えが十分でなかったことである。

津軽石小学校の体育館へは当初から４００人以上が避難し、極めて手狭であり、また隙間風が入って寒いなど、環境が劣悪であった。避難した人たちは辛い思いをしながらも、そこにいることしかできず、身体的・精神的なストレスの大きな状態が長期間続いた。ふだんであればやり過ごせる程度のことであっても、そのような状況下においては、敏感に反応してしまう可能性がある。

次に、この地域の20自主防災会は日頃の活動をほとんどしてこなかっ

たために機能できないなど、災害への備えが不十分であった。そのため、津軽石小学校体育館に集まった避難者を統括できる人は当初だれもいなかった。それを見かねた本町町内会長の若狭氏がやむをえずその役割を買って出た。20自主防災会が管轄するエリアの町内会長は、若狭氏以外、だれも避難していないなど、他にそれをできる人がいなかったためである。しかし、若狭氏は本町の町内会長であり、本町以外の町内会、とりわけ新町の事情はよくわからない。また、災害時にどのように対応するかについての話し合いや、具体的な備えは事前に誰ともしていない。つまり、混乱の中、やむを得ず引き受けたのであり、その役割を遂行するのに必要な知識、経験、人脈を十分にもっていたわけではない。さらに、さまざまな事情から、小学校の教員や市の職員の協力を取り付けることができず、避難所運営の方法に関する幅広い知見を利用できなかった。そのため、若狭氏ら少数の運営者がその場その場の判断に基づいて対応する他なく、結果として配慮が行き届かない範囲ができてしまった。

以上の2点が重なり、避難所の運営は必然的に困難なものになった。多くの人が身体的・精神的に追い詰められる中で、一部の人たちに配慮が行き届かなくなり、それが積み重なり不満につながった。多くの人がやむをえない状況下において共同生活する。その中で円滑に物事を進めるためには、できる限り配慮の行き届かない範囲を減らし、対応に差が出ないようにする必要があることがわかる。

しかしそれは、言うは易く行うは難しであろう。同じ避難所にいる人であっても、置かれている状況はそれぞれ異なる。住んでいた地区がどこか、自宅が残っているかいないか、家族のうち誰と誰が一緒にいるか、心身の調子がいいか悪いか、などさまざまな条件により、その人がそこでできること、あるいは必要とするものやサービスは異なる。だとすれば、少数の人が一手に責任を引き受けるような形ではなく、そこにいる人がみな、できる限り互いの置かれている状況を理解しあい、力を合わせることができるような体制を構築していくことが必要であろう。

以上から、避難所の運営に関して指摘されるさまざまな問題は、運営者個人の資質に還元して理解するよりは、避難者ひとりひとりから構成される避難者共同体の、構造の問題として理解すべきであると考えられる。津軽石中学校などの避難所の取りまとめ役を担った21自主防災会は、震災以前から毎年、会員ひとりひとりから会費を集めつつ、自主防災会の活動を周知し防災の意識を喚起することを、地道に続けていた。その小さな努力の積み重ねが、震災の際の比較的スムーズな人的資源の活用につながったのである。他方、20自主防災会が機能しなかった反省から、震災後、下町では独自に自主防災会を立ち上げて防災倉庫を設置するなどの活動を始めている。震災を機に始まったそうした活動を継続し、地域の人々の防災意識を維持し、人的なつながりを保持することが肝要であろう。

(6) 生活の立て直し、復興への道

震災から時間が経つにつれ、日常の生活をいかに立て直すかという点が大きな関心事になってくる。しかし家屋が失われたり、大きな被害を受けたりしている場合、生活を立て直すことは容易ではない。被害を受けた農地や漁業施設についても、それを元通りに復旧させるのか、断念するのかという選択を迫られる。未来を描くことはしばしば困難であり、描いたとしてもその道のりは往々にして険しいものになる。以下では、(ア) 水に浸かった家屋の修繕、(イ) 農業・漁業の復興、についてみていく。

ア 水に浸かった家屋の修繕

一旦津波に浸かった家屋は、外観上はさほど変わらないように見えても、そのままそこに住むことはできない。津軽石小学校の避難所に身を寄せていた人々の家屋には、そのような状況にあるものが少なくなかった。津軽石川左岸では津波の勢いはさほど強くなく、水位がじわじわと上がっていったところが多かった。そのため多くの家屋は流されはしなかったものの、多量の海水や泥が入り、その修繕に苦労し

ている。

■自宅の風呂を修理して入るも、傷から菌が入り腫れ上がる

私が最初に風呂に入ったのは震災の2週間後だった。小学校の校庭に自衛隊が風呂を設置してくれた。だが夫は大勢が入る風呂に入りたくないと言って、自宅の風呂をなんとか直し、3週間目に初めて入った。

夫は糖尿病があるため、気をつけて手足を洗っていたが、足から菌が入ったのか、足がパンパンに腫れてしまった。本人は大丈夫だと言っていたが、私や他の人が、足が腐るかもよと説得し、津軽石小学校に来ていた医師団にみせたら、これは大変ですと言われ、切開して患部を切除し、その後も1週間、毎日通った。

水は近所の井戸を使わせてもらったが、いろんなものが混ざっていたと思うが、カセットコンロがもったいないから完全に煮沸しないで洗うのに使っていたから、それもよくなかったかもしれない。（盛合純子氏、聞き取り10）

■泥だらけの自宅を苦労して片付ける

自宅は背丈ほどの水が入ったため何もかも泥だらけで、1回洗っても乾くとまだ泥がついていて、何回も洗わなければならなかった。食器棚も水洗いした。冷蔵庫は大丈夫かもしれないと話していたが、行ってみると横倒しになっていて、使って万が一そこから火が出るのは嫌だったから処分した。水を含んだ畳は大人の男が2人でも持ちあげられない。自宅は、台所以外はみな畳が敷いてあったので、運び出すのが大変だった。家の裏に倉庫代わりにしている建物があるが、そこにも畳があったために運びださなければならなかった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■電気を使えるようにするのに一苦労する

地域に電気が通ったのは3週間後だったが、電気屋に頼んでいたらとても時間がかかるので、夫がホーマックやケーズデンキに行って、数量限定のコンセントを少しずつ買ってきて、自分で直して、最後に電気屋さんに漏電していないかチェックしてもらった。これを電気屋に頼んだら3か月かかるといわれた。

私たちと似た状況にはなかった人たちはそういう大変な事情を知らない。家があるといっても囲われているだけで、電気を通すだけでも大変だった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■自ら自宅を修繕すると補助金が出ず、頼むと3か月かかる

夫はもともと大工だったため自分で家を直すつもりだったが、自分で直すと補助金が下りないということで、他の人にお願いすることにしたが、待っている人がたくさんいて順番待ちになった。畳がようやく入ったのは、お盆の前だった。それまで1階はスリッパで歩き、台所に入る時に脱いでいた。畳が入ったときはありがたくてみな喜んだ。

娘はでかけていたので娘の車は大丈夫だったが、夫の車は車庫に入れたままだったためダメだった。買い物に行くことができず、娘が手伝いに来た時にあちこち買い物に行った。私はしばらく自宅の周辺にしか行かなかったが、新町公民館に支援物資をもらいに来たついでに娘に連れられて国道のほうへ行き、初めて自宅周辺以外の被災の状況をみて、涙が出た。（盛合純子氏、聞き取り10）

■他所に避難していたが、戻って自宅を新築した

鮭川（津軽石川）の事も気になっていたので半月後に帰った。電話が通じず困った。家を貸してもらって2か月くらいいた。近所に空いている家を探した。被災後に改造した家があり、1年半そこに住んだ。98の母をこのまま送り出せないと決断して、昨夏、津軽石小学校の近くに土地を取得し家を新築して、今はそこに住んでいる。母はデイサービスを利用できている。

母は昭和8年の三陸地震津波、チリ、そして今回で3回経験している。私はチリ地震の時は盛岡にいて、家はチリの際も流されたので、高台に移転して家を建てた。5～6年後、津波は来ないんじゃないか、敷地も狭いし場所もよくないというので元の法の脇に戻って新築して、

今回被災した。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

イ　農業・漁業の復興

津軽石の人々の暮らしを支えてきた、農業や漁業関連の施設も震災により大きな被害を受けた。周辺の農家が集まり復興のためにつくった「津軽石・赤前・白浜復興組合」と「津軽石鮭繁殖保護組合」の事例を見ていく。

■津軽石・赤前・白浜復興組合

「津軽石・赤前・白浜復興組合」は、震災後に農家の組合を改変して作った。このような組織を作らないと、資金を受け取ることができない。震災でみな耕作をやめてしまっているが、道路をどうするか決まっていないために前に進まない。住民が結束して、計画を立てて、ようやく交渉ができる。今のところ3年間だけ面倒をみるといわれている。

田んぼも水路も井戸もポンプもみななくなった。機械はもらってあるが、耕作をやりたくてもできない。地権者に対しての説明が未だになく、向こうの出方を待っている状態である。しかし、農家はみな年をとっており、後継者もいないから、田んぼが元に戻っても以前のように耕作はできないかもしれない。

話が進まない代わり、20人ほどの雇用があり、7月と11月に1週間、時給１４００円で草刈りをした。1日5枚、写真を撮って報告するように言われた。その他、田んぼ1枚に3万5千円出る。いくらかでも現金を得るためにやっているが、草刈り以外は何もできない。浜の人たちは時給１５００円でがれきの処理をしている。（猪又忠氏、聞き取り5）

■津軽石鮭繁殖保護組合

津軽石鮭繁殖保護組合は特殊である。漁業権は宮古組合がもっているが、運営は地域の組合員が宮古漁協から委託されてやっており、利益は１００％もらえる。孵化場の卵は漁協のものだが、残った卵や採卵後の魚は組合が販売する。

津軽石鮭繁殖保護組合は任意団体であるため、震災から復旧するのに国の補助が出なかった。震災後の4月に自前で復旧しようと、自分たちで事務所を建てて倉庫を作り、採卵場もすべて作った。9月までに体制が整った。組合員も被害を受けていたので、７００人の会員に、1組合員当たり20万円の援助をした。昭和44～45年に、宮古漁協と合併したとき、川と孵化場は津軽石に残してほしいという条件を出した。採卵後の魚は自由に売り、地元のためにしてよいということになり、その利益をこれまで貯蓄してきた。この金はこういう時に支援すべきだと決めた。

私は漁協を退職した後、震災の前年にこの組合の組合長になった。運営がうまくいっていなかったため、頼まれて引き受けた。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

■震災後、鮭の遡上が少なくなった

震災後の平成24年は鮭が獲れなかった。平成23年も悪かったが、それよりさらに8千匹ほど少なく、卵の販売ができなかった。90％以上が孵化場へいってしまい、身入りが少ない。原因はよくわからない。太平洋岸は北海道も少なかったが、オホーツク海の方が量はあったという。放流数は同じだが、回帰数が少ない。津波の影響はわからない。津波のときはまだ放流を終えていなかった。5割ほど放流した段階で、放流した稚魚もまだ湾内にいた。津波の後、上流で稚魚がバタバタしていた。鮭の回遊が少ないと県の漁業は大きな痛手になる。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

組合で上がってくる鮭を捕えて、イクラハラコを取り出して販売し、漁協が孵化場で孵化させて、3～4月にかけて放流する。各小中学校に教育用にあげて、川に放流したりする。10月に閉伊川、11月から1月に津軽石川で捕るが、震災後、鮭がほとんど来なくなった。震災のときも放流する時期だったが、稚魚がみんな流されて放流できなかった。去年も少ししか放流できなかった。この4、5年は上がりが悪いのではないか。

販売するときも、経費節減のため、理事、幹事がぜんぶ出て、自分

たちで販売した。整理券をだして、1、3、5本などと制限した。ここしばらくはそういう状況が続くと考えられる。水産庁によれば、津波のために海に餌がなくて、鮭がとても小さく、数も少ない。障害物もある。網を掛けてる漁協の船も、やはり捕れないという。各漁協が網をかけていて、そこをすり抜けたのだけが川に来る。（藤沼久人氏、聞き取り4）

津軽石川の右岸を中心に、津軽石には震災前、広大な田畑が広がっていた。しかし、その大半が海水や泥につかり、また水路などの施設も破壊されてしまった。地域の復興計画で区画を一新して道路を通す案が示されるなど、元の場所で以前のように農業を行うことは難しくなり、かつ計画が進まないまま時間が過ぎ、農家は将来を見通せない状況が続いていた。

漁業についても、漁場や施設が破壊されただけでなく、津波がちょうど稚魚の放流の時期と重なったことから、将来に渡って鮭の遡上の減少が見込まれ、実際にほとんど遡上がみられなくなってしまっているという。

最後に

津軽石で筆者が話を聞いた方々の多くは、震災当時、人々の救助や生活の支援など、地域でなんらかの役割を果たしてきた。自らも地震津波により大きな衝撃を受け、また物理的な被害を受けている中で、むしろ他人のために働き続ける。その姿を直接目にしたわけではないが、その切迫したお話を聞いているだけで頭が下がる思いがした。

他方で、彼らはそのように人々に尽くしたにも関わらず、あるいはそれゆえにか、苦悩しているように見えることがあるのが気がかりだった。辛い作業をした記憶が消えずに残り続ける。あるいは自分が下した判断が必ずしも正しくなかったかもしれないという後悔の念に苛まれるなど、具体的な内容はさまざまだが、震災の傷痕がいまも見えない形で残っていることを実感した。

巨大な自然の力に圧倒され翻弄されているさなかにも、少しでも被害を軽くしたり、人々をケアしようとする彼らの努力は続いている。その努力がより多くの結果を生み出すために、必要な条件とはなんだろうか。まず、避難訓練に参加することや持ち出し袋を用意することなど、一人ひとりの災害への備えが必要であろう。また行政や関連団体などが防災・減災のための計画をより洗練させ、施設や装備を充実させきちんと稼働するように管理することも重要であろう。しかし何より重要なのは、一人ひとりがその周囲の人たちと互いに気や心を配りあうような人間関係を日頃から培っておくこと、それを可能にする仕組みを地域社会がつくりだすことではないだろうか。

【参考文献】

宮古市教育委員会『宮古市史 民俗編 上巻』１９９４年。宮古市
「月刊みやこわが町」通巻３９２号「２０１１・３・11東日本大震災 読者投稿ＰＨＯＴＯ 津軽石 長洞利弘」２０１１年８月。
宮古市「広報みやこ」ＮＯ．１５１、２０１１年12月１日。
宮古市『宮古市東日本大震災津波浸水図』２０１２年９月。
宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～』２０１３年３月。
宮古市教育委員会・宮古市教育研究所『東日本大震災の記録―調査報告書』（平成23年度研究紀要第79号別冊）２０１２年３月。
宮古市中央公民館『平成23年度宮古市中央公民館事業 ３・11大津波体験語り継ぎエピソード集』２０１２年５月。
宮古中央公民館『平成24年度宮古市中央公民館事業 ３・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第２期】』２０１３年３月。
宮古市東日本大震災記録編集委員会『東日本大震災 宮古市の記録 第１巻（津波史編）』２０１４年３月20日。
中野規男「活動報告⑤ 宮古市消防団第20分団出動記録」（日本消防協会『東日本大震災全国消防団報告研修会報告書』財団法人日本消防協会、http://www.nissho-jyouhou.jp/nisshohp_img/

higashinihon-daishinsai/pdf/houkokusho05_miyakoshi.pdf)

体験談1：「タオル1本、新聞紙のありがたさ」（80代 女性）、『エピソード集1』1頁。

体験談2：「地震が来たら津波と思え」（70代 男性）、『エピソード集2』59～60頁。

【参考資料】

■聞き取り

筆者は下記の10回、地域の方々からお話をうかがった。「聞き取り1」から「聞き取り10」まで番号を振り、本文中にはその番号で示した。このうち「聞き取り1」は神田より子による。

聞き取り1：平成25年3月18日、山野目輝雄さん（1936年生）、津軽石鮭養殖組合事務所にて

聞き取り2：平 成25年3月25日、長澤光彦さん、宮古市消防団第二十三分団屯所にて

聞き取り3：平成25年3月26日、藤沼久人さん（1941年生）、佐々木睦雄さん、藤沼さん宅にて

聞き取り4：平成25年3月27日、藤沼久人さん、藤沼さん宅にて

聞き取り5：平成25年3月28日、猪又忠さん、大手一男さん、大手さん宅にて

聞き取り6：平成25年3月28日、野崎昭敏さん（1940年生）、佐々木優さん（1948年生）、津軽石下町公民館にて

聞き取り7：平成25年9月13日、長澤光彦さん、宮古市市史編さん室にて

聞き取り8：平成25年9月14日、中野規男さん、若狭斌さん、宮古市消防団第二十分団屯所にて

聞き取り9：平成26年8月16日、舘下光利さん、津軽石新町公民館にて

聞き取り10：平成26年8月17日、盛合純子さん（1965年生）、舘下光利さん、津軽石新町公民館にて

■藤沼久人氏提供資料

藤沼久人「今回の震災の防災会の活動について」（宮古FM収録用原稿、平成23年8月22日放送）

藤沼久人「宮古21防災会」（宮古FM収録用原稿、平成23年8月22日放送）

「避難者を励ます舘下良一コンサート」（平成23年5月15日、津軽石中学校）

「津軽石中学校における支援物資の配布1」（平成23年4月10日、津軽石中学校）

「避難者への支援物資の配布」（平成23年4月30日、津軽石中学校）

「津軽石中学校における支援物資の配布2」（平成23年5月8日、津軽石中学校）

■その他

「大震災 宮古市避難所状況一覧」（「東日本大震災避難所等提供資料」）

「緊急物資配送状況 3／18」「緊急物資配送状況 3／19」「緊急物資配送状況 3／30」（「東日本大震災避難所等提供資料」）

「避難所調査書 H23・3・23」（「東日本大震災避難所等提供資料」）

「東日本大震災による流失した施設復旧までの経過」（津軽石鮭養殖組合）

「避難所への情報提供 1～28」宮古市（http://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/hinanjo_joho.html）